東風のリヴィエラ

奄美の黒兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東風のリヴィエラ

【Ｎコード】
Ｎ７９３８Ｒ

【作者名】
奄美の黒兎

【あらすじ】
大人気ＶＲＭＭＯ『東風のリヴィエラ』をクローズドβから続けてる廃人な少女キャラクターネーム『リノ』はいつも通りプレイをしていると一通の奇妙なメールが届いた。「新世界への旅立ち」との件名で内容にはゲートオープンとだけ記してあった。何気なくその言葉を呟いた瞬間に彼女の世界は終りを迎えた。新しい世界を前に少女はその瞳に何を映し出すのか…

東風のリヴィエラについてお知らせ（前書き）

掲載が遅れてしまい申し訳ありませんでした。

東風のリヴィエラについてお知らせ

当作品に関しまして読者の方よりＣｅｅｚ様の「リアデイルの大地にて」と似ているのではないかとのご指摘がありました。

私の方で確認したところ確かに結構な部分が似てしまっていると感じました。

そこでＣｅｅｚ様に連絡を取り確認したところ

～ここから～

こちらでもソチラの小説をざっと確認いたしました。

確かに良く似ていますけれども、これだけ書く人がいれば似通った思考から似たような文章になってしまう場合はあると思います。

私も奄美の黒兎様も双方の小説を知らなかった事からそれが確定的だと思っています。

なのでそちらの小説はそのまま続けてもいいと思いますよ。

～ここまで～

以上の様に返事を頂きました。

まさかこの様な事になるとは思っていませんでしたがＣｅｅｚ様にも上記のように仰って頂けましたのでこのまま連載を続けられたらと思っています。

今後もよろしくお願いします。

００話：終わりと始まり（前書き）

読み始める前に「東風のリヴィエラについて」をご一読ください。

００話：終わりと始まり

東風のリヴィエラとはオンラインゲーム（ＶＲＭＭＯ）だ。

発表当初は多彩な職業、スキルや魔法の多さ、何よりマルチキャストシステム（以下ＭＣＳ）が話題となり随分賑わった人気ＶＲＭＭＯだった。

ＭＣＳとは職業Ｌｖを一定Ｌｖまで上げてキャストクエストを攻略すると基本職からもう一つ職業を選らべるというシステムだった。

要するに転職だが、このシステムの特徴は前の職業をクエスト攻略時に覚えるスキルを使うことにより自由に切り替えられる点だ。

そして発表から5年が経った今では基本職をＬｖ上限まで上げるとその基本職の上位職を選べるようになっていた。

しかし、実際に上位職になったものはゲーム人口が３００万人と言われる中で一握り約１５００人と言われている。

なぜそんなに少ないかと言うと通常Ｌｖ１５０もいけば上位組として名が売れＬｖ２００までいけばスキルの大半を取得できるからだ。

だけど世の中には暇人もいたもので１５００人もいた。彼らは所謂『廃人』と呼ばれている。

その中で更に一定の条件を満たすと特殊クエスト『天空の園庭』受けられるようになりクリアすると報酬としてスキルと拠点を持つことができる。

ちなみにクエストのクリア者はゲーム会社から規約違反のユーザーを取締る為にＧＭの補佐をやって欲しいと提案があった。

しかしＧＭ補佐は取締ったユーザーから恨まれる事が多く一般ユーザーからはほとんど感謝もされない嫌われ役だった。

なのでクリアした者は３００人余りと多いが引受ける者は１０人ほどしかいなかった。

その１０人は運営から『マイスター』の名を与えられ公式ＨＰで告知された。

「よ～し、そろそろ引き上げるか」

そういって仲間へ振り返った。

「そうですね、クエスト目標は達成しましたし良い頃合です」
「だな、それにさっきから早く寝ろってお袋が煩いし（笑）

二人の仲間も返事を返した。

「っし、じゃあ分配は最初決めた通りで良いよな？」
「はい」
「おｋ」

二人から了承を得て分配を終えた。

「じゃ、俺は落ちるな」
「俺もそろそろお袋がキレそうだし落ちるわ」
「了解、ボクは報告に行ってきます」

「いてら～」と言って二人はログアウトした。

二人がいなくなったのを確認して軽く伸びをした。

「やっぱ野良ＰＴは緊張するな～ソロの方が性にあってるかも」

そうボヤくリノだった。

「でもまぁ仕方ないか」

スキルの中には特定の人員や特定のアイテムが必要なクエストも存在している。
リノはギルドに所属をしてはいるがタイミングが悪かった様で全員オフライン。
なので基本的に知合いのみでしかＰＴを組まないリノだったが今回

は已む無く野良ＰＴを組むことにしたのだった。

～第一首都エトス～

ポーン

「ん？メール？今日は誰もいない筈なのになぁ」

リノはメーラーを開いた。

件名は「新世界への旅立ち」差出人は「ｊｌｖｃ、ｘヴｔファｔｃ」

文字化けしていた。

「何これ、変なメール」

なんだか気味が悪いメールだな。と始めは思っていたが件名が気になったので意を決して開封してみることとした。

「ゲートオープン？コレだけ？」

と言うのも内容は本当に『ゲートオープン』とだけ記されていた。

「うーん、意味が分からない」

ザ…ザザ…

「え？何このノイズ？」

突然聞こえてきたノイズに顔を顰める。

そして次の瞬間グラフィックが崩壊を始めた。

「な！？」

徐々に視界から色が落ちていく。

「一体何が起きてるの！？」

パニックに陥ったリノを無視して尚もグラフィックが崩壊していった。

「とと、取り敢えずログア…」

そこでリノの意識は途絶えた。

００話：終わりと始まり（後書き）

基本作者の自己満足です。何がしたいのか作者も分かりません。
文章も稚拙なので読み難く言い回しも奇妙な所が多々あるでしょう
がスルーな方向でお願いします。

０１話：辺境の村

～トレントの森～

サワサワ
木々の間からは朝日が漏れ、少し風が吹くたびに葉っぱ同士が擦れて気持ちのいい音が鳴る。

「んしょ、これくらいでいいかな」

そこにはカバン一杯にキノコを詰込んだまだ幼さが残る女の子がいた。

「これだけあればだいじょうぶだよね」

そうして帰路に着こうとしたところでいつもと森の様子が違う事に気がついた。
いつもなら友達のシン（小動物）が見送ってくれるのに今日はいなかったのだ。

「シン？」

リルはなんだか気になったので少し探してみることにした。
とりあえず気配のする方へ進んで行くと唐突に森が開けた。

「わーこんなところがあったんだ」

女の子が着いた場所はいつもの採取場所から１０分ほど奥に入った

場所だった。

「あ、シン！ここにいたん…」

そこで見たのは木に寄りかかる女の子だった。

「ど、どうしたの！？」

近づいて声を掛けてみるが返事はない。
伏せている為顔も見えない。
今度は思い切って顔の見える位置まで移動してみた。

「あ…」

とそこまで移動したら彼女が目を開いた。
何かを呟いたと思ったらまた目を閉じてしまった。

「あ、あの…」

どうやら気を失ってしまったようだ。

～宿屋～

「……」

まず目に入ったのは板張りの天井だった。

「こ…こは？」

「お、目が覚めたかい？」

声のした方に顔を向けるとそこには人間族の女性が立っていた。

「ずっと目を覚まさないからどうなる事かと思ったよ」

よかったよかったと笑顔で言った。

「あ…の、ボクはいったい…」

「ん？あぁあんた森の奥で倒れてるのを娘が見つけたんだよ」

「…え？」

「あんな所で一体何をしてたんだい？」

女性の話を聞いてリノは驚いた。

「なんで！？ボクは首都にいたはずなのに！」

「ちょっと！いきなりどうしたってんだい？」

突然窓に向かったリノに女性は慌てた。

「うそ…」

そこで見たものは一面の森だった。

「ほら、まだ無理しちゃだめだよ」

力なく座り込んだリノを女性はベッドに連れて行った。

「とりあえず座ってな」

「…はい」

おとなしく座った所でドアからノックの音がした。

「開いてるよ」

そう女性が返事をするとそっとドアが開いた。

そこにいたのはリノを見つけた女の子だった。

「お母さん、村長さんさん着いたよ」

「そうかい、じゃ連れてきてくれるかい？」

「うん」

そういってドアを閉めて呼びにいった。

「今のがあんたを見つけた子であたしの娘だよ」

「そうなんですか…後でお礼を言わないと」

ちょうど話が途切れたところに村長と呼ばれた老人が部屋に入ってきた。

村長の見立てで疲労とただの空腹だそうだ。

村長が帰った後、用意してもらった食事を食べながら簡単に自己紹介を説明した。

～自室～

次の日
コンコンと控えめなノックの音
「ん…」
コンコンコン
「お姉ちゃん、朝ですよ～」
今度はノックと共に幼い声が聞こえてきた。
「ふぁ～い」
ノックに完全に寝惚けた返事を返した。
「朝食の準備出来てますから来てくださいね」
「うにゅ、わかりましたぁ」
「だいじょうぶかな…」
不安になる返事だったがドアの気配は去っていった。
「んあ～起きなきゃ…」
むくりとベッドから体を起こし閉じていた窓を開いた。

「おーいい天気だぁ」

窓の先には一面の緑、トレントの森が広がっていた。

「うん、相変わらず緑いっぱいだね」

少し気分が沈んでしまった。

「ま！気にしたって仕方が無いよね。まずはゴハンを食べよう！」

いそいそと食堂を目指すリノだった。

～食堂～

「おはようございます」

「お、おはようさん」

「おはようございます」

入ってきたリノに気がついたマリナとリルが挨拶を返してきた。

「もう朝御飯出来てるからちゃっちゃと食べな」

「はーい、いただきます」

今日もメニューはパンとキノコのスープだった。聞いたところ朝はいつもこのメニューなんだそうだ。
しかしこのキノコのスープ意外な事にこの宿屋の人気メニューだったりする。
どうやら出汁に秘密があるようだが教えられないとの事だった。

「昨日も頂きましたがマリナさんのスープ美味しいですね」
「そうかい？そう言って貰えると嬉しいねぇ」

はっはっはと豪快に笑った。

「お姉ちゃん、お水どうぞ」
「ありがとうリルちゃん」

お礼を言って頭を撫でてあげると「えへへ」と照れながらも嬉しそうだった。

「リル今のうちにシーツを変えてきな」
「うん」

マリナにそう言われ名残惜しそうにリルは食堂を後にした。

「その様子だともう大丈夫みたいね」
「えぇお陰さまですっかり元気です！」

顔色を見ていたらしいマリナは安堵したようだ。

「しっかし、こんな時勢に一人旅とは驚いたよ。しかもこんなに可愛い娘が」
「いやいや可愛いだなんてとんでもない！からかわないでください

よ」
「いや、全然からかってなんかないさね」
「う〜」
普段言われないのだろう可愛いと言われて顔をブンブン横に振って否定した。
マリナはあまり言うのも可哀想だと思い直した。

「それで？目的地は何処なんだい？」
「あ、えーと実はエトスの街を目指してたんですけど」
「エトス？」
「はい、首都のエトスなんですがどうも道が変わってるみたいで迷ってしまって…」
そこまで言ってマリナの顔が変なものをみる感じになっていた。

「あんた首都っていつの話をしてるんだい」
「え？」
「エトスはもうないよ」
マリナに言われた事が理解できずにリノは言葉を失った。
その様子を見たマリナは訳有りなのかと思い話題を変えることにした。

「そうそう、まだ勝手が分からないだろうからお昼は食堂に食べにおいで」
「あ、はいわかりました」
その会話を最後にリノは食事に戻った。

「ごちそうさまでした」
「はいよ」
「あ、良かったらコレ読んでみな」
席を立ったリノにマリナは一冊の本を渡した。
「あ、ありがとうございます」
取り敢えず本を持って借りた部屋に戻ることにした。

〜廊下〜

部屋に戻ろうと廊下を歩いているとシーツを持ったリルを見つけた。
「あ、お姉ちゃんシーツかえおわったよ」
リルもリノを見つけたみたいでそう声を掛けてきた。
「ありがとう。大変そうね手伝おうか？」
両手一杯にシーツを持ったリルが危なっかしかったので手伝いを申し出たが

「ん～ん、いいのこれはリルの仕事だから」
と断られた。
「そっか、それじゃあ頑張ってね」
「うん」
そう言ってシーツを抱え込んで歩いていった。

～自室～

「さて、沈んでばかりもいられないし今の状況を整理してみましょうか」
自室に戻るなりベットに横になったリノは現在の状況を振り返ることにした。
「とりあえずいくつかのメニューは開けるみたいね」
取り敢えず開けるだけメニューを開いてみた。
無論ログアウトを真っ先に探したのは言うまでも無いが、開けたのはステータス・アイテム兼装備（インベントリ）・倉庫・スキルの４つだけだった。

倉庫は自室限定のようだ。
「ん～これだけかぁログアウトが無いのがとても不可解ね」
と呟きながらステータスを確認するのだった。
「あれ？」
見慣れたはずのステータス画面をみてどこか違和感がある事に気がついた。
「あ！職業欄がない！」
慌ててスキルを確認するがＭＣＳ用の枠が存在せずすべてのスキルが渾然一体としていた。
「うそ、なんで…これじゃＭＣＳ使えないってこと？」
目線をステータスに戻すとステータスポイントが最後に確認した数値より上昇していた。
「これってもしかしてＭＣＳで取得した職業の合計値なのかな」
「ま、まぁログアウトが存在しないよりはおかしくない…よね？」
答えはどこからも返ってこなかった。
その後所持金と所持アイテムの確認もしたがこちらは特に変化はなかった。
「次はこの世界の事かな」

先ほど借りたマリナの本を読むことにした。
マリナから借りた本には１２０年前の人魔戦争について書いてあった。
要約すると１２０年前エトスは突如として出現した魔族により一度占拠されたらしい。
だが、当時『マイスター』と呼ばれていた人物達の尽力によって魔族を退ける事に成功した。
しかし、完全に駆逐する事はできずに世界のどこかに存在するとされる『神樹の社』に封印することを余儀なくされた。
そして奪還したエトスは魔族に破壊の限りを尽くされて街としての機能を完全に失っていた。

パタン

「ふぅ～なるほどね」

本を閉じて一息入れた。

「エトスの崩壊、人魔戦争、神樹の社…確かゲーム会社が気合を入れた大型アップデートで実装されるイベントとＭＡＰのはず」
「というか気を失った日から１２０年経ってるとか意味不明だし…しかも首都にいたはずなのに気がついたら森の中なんて」
「あれ？でも人魔戦争は１００年に及ぶ魔族との戦争って設定のはずで色々差し引いたら実際は２００年くらい…」

最早驚くのに疲れていた。

「一番悪いのはログアウトが出来ないってところよね」
「はぁ、もうわからないことだらけよ…」

行き詰まり溜息ばかり出るリノであった。

「う〜こうなったら気分転換でもしよ」

ベッドから降りたリノはふらふらと歩く事にした。

０１話：辺境の村（後書き）

設定も何も考えずに書いてたから改稿の繰り返しです（汗

０２話：暖かな村人（前書き）

設定がカオスになってきた気がしますが気にしないでください。

02話：暖かな村人

～宿屋前～

結構な時間を部屋で過ごした気がしたがまだ日は昇りきっていないようだった。

「ん～、さてどこに行こうかな」

軽く伸びをしながら今後の方針を考える。

「とりあえずボクが見つかったって場所に行ってみたいけど…」

と思ったものの全然覚えていなかった。

「とりあえず森の方へいってみよっと」

森の入り口は村の外に在るらしかったが近いのでリノは宿屋の裏側から向かうことにした。

～宿屋裏～

宿の裏手に回るとちょうどシーツを干し終わったリルがいた。

「お疲れ様リルちゃん」
「あ、お姉ちゃん」

仕事を終えたリルちゃんを労い頭を撫でてあげた。
リルは気持ちよさそうに目を閉じてされるがままだ。
少しの間そうしてたがいい加減に撫でるのを止めた。

「お姉ちゃんどうしてここに？」
「ボクはちょっと森に行ってみようと思ってね」
「あ、もしかしお姉ちゃんがいた場所に行くの？」
「うん、その予定だったけどよく考えたら場所覚えてないのよ」

苦笑しながらリルの問に答えた。

「それなら私が案内してあげるよ？」
「え？でもまだお仕事があるんじゃないの？」

リノを見つけた本人にお願いできるならそれに越したことはないが
リルはまだ仕事中だ。

「うん、でもお昼までって言われてるの」

だからお昼からでよければ、との事だった。

「そうんなだ～案内して貰えるなら大助かりよ」
「うん、まかせて」

小さな胸を反らせて頷いた。
そのままリルは次の仕事に向かっていった。

「それじゃお昼まで他のところ行こうかな」
踵(きびす)を返しリノは来た道を戻っていった。

～村の入り口～

テキトーに歩いてると村の入り口で人が集まって話をしていた。
「どうしたのかな？」
こんなところで野次馬根性を発揮して近づいていった。
「やはり、まだ見えませんね」
「ふーむ、そうかの」
なにやら難しい顔で話をしている。
とリノに気付いたらしく一人の男性が近づいてくる。
「お、腹ペコ嬢ちゃんじゃないか」
ベチ、思いっきりコケるリノだった。
「おいおい、大丈夫か？」

直ぐに起き上がったが鼻が赤かった。

「うぅ大丈夫です…」

「そうか、いきなりコケるからビックリしたよ」

「誰のせいですか！」

若干涙目になりながらも抗議する。

「おーい、言われてるぞー」

「いやお前だろ！」

コケる原因を作った本人は他人に投げて打ち返されていた。

「いやわりぃわりぃ冗談だよ」

と笑いながらだが一応謝ってきた。

「まったく！酷いです！ボクにはリノって名前があるんです！」

「はっはっは」

実際、空腹だったのは事実なので強くは否定はできないのだが、だからと言ってそんな呼び名は嫌すぎる。

「ところで何かあったんですか？」

「ん？あぁ大した事じゃないんだが」

話を聞くと今日は王都からの商団が到着する日らしい。商団は月に1度訪れるそうだ。

だがおかしな事に毎月決まった日に到着するはずが今月は2日も遅

れている。

「本当ならもう到着してる筈だったんだがな」

「それで村長とも話しとったんだよ」

なるほど、と頷く。

「村長、とりあえず明日まで待ってみんか？」

「そうですよ、明日も到着しなかったらまた話し合いましょう」

「皆がそう言うのであればその方が良いかもしれんの」

どうやら結論が出たようだ。村長を残し立ち去っていった。

残ったのはリノと村長だけだった。

「さて、おまえさんはこれからどうするのじゃ？」

「ん～そうですね…」

返答しつつ天を仰ぐと太陽はもう真上まで昇っていた。

「お昼ゴハンにしようと思います」

「そうか、ではワシもそうするかの」

そこで村長と別れた。

～食堂～

リノは散歩を終えて食堂へ続くドアを開るとちょうどマリナが厨房から出てきたところだった。

「おかえり」
「ただいまです」

お昼という事もあっていくつかテーブルが埋まっていた。
空いているテーブルもあったがどうせ一人だしと思いカウンターに座ることにした。

「ほい、お待たせ」

そういってマリナさんが料理を運んできた。
メニューは朝と同じパンとキノコのスープだったが美味しいのでリノには不満はない。
その証拠とばかりに綺麗に食べ終えるのであった。

「さて食べ終わったね」
「あ、はいごちそうさまでした」

食べ終わったのを確認してマリナが話しかけてきた。

「昨日まで倒れてたあんたに言い難いんだけど、うちも商売でね」

マリナはとても言い辛そうに話を切り出した。

「あ！そうでしたね。すいませんすっかり失念してました」
「いや、良いんだよ理由もわかってるから」

「それでもです、さぁ遠慮せずに続けててください」
「そうかい？それじゃ続けようかね」
リノにそう言われマリナは気が軽くなったようだった。
「うちでは前払いで１泊朝食付きで２００Ｒ（リン）、昼食と夕食は別料金になってるんだ」
「昼時はこの食堂を開放してるから自由に使って良いよ。あと夕食時は酒場も兼ねるからちょっと騒がしくなる」
とそこまで一息に説明を終える。
「とりあえず明日の朝食分までは料金は要らない」
「え！？そういうわけにはいきませんよ」
思わず身を乗り出してしまった。恥ずかしい…
「そのかわりに頼みがある」
マリナは落ち着けと手で制した。
「頼みってのはリルと遊んでやってほしいんだ」
「へ？それでいいんですか？」
予想では宿の手伝いあたりかと思ってたが的外れだった様だ。
「ああ、悪くないと思うけど？」
「悪いどころかとてもいい条件なんですけど…良いんですか？」

リルと遊ぶだけで明日の朝食まで無料というのはやはり気が引けてしまう。
しかし、マリナは頼むだけの理由があると言う。
「この村じゃリル以外に子供がいないんだよ」
話を聞くとどうやら若い夫婦連中は田舎を嫌い子供を連れて都会へ出て行ったそうだ。
「だからね遊び相手がいないんだよ」
「そうだったんですか…」
「その点あんただったらリルも気に入ってるみたいだしね」
そういう事だったら考えるまでも無かった。
「ボクなんかで良ければ喜んで」
「それに仕事が終わったらボクが見つかった場所に連れて行ってもらう予定でしたし」
「なのでリルちゃんと遊ぶのはボクの意思です。だから代金は支払わせてもらいます」
ここは譲れないところだ。
マリナは一瞬驚きの表情を浮かべたが直ぐに笑みに変わった。
「やっぱりあんたに頼んで良かったよ」
バシバシと背中を叩いてきた。
「それじゃもうすぐ一段落するから部屋で待ってな」
「わかりました」

そうしてマリナは仕事へリノは借りてる部屋に戻っていった。
部屋に戻って出掛ける支度を済ますとちょうどリルが来たので早速出掛ける事にした。

〜トレントの森〜

「お姉ちゃんこっちだよ」
「前を見ないと危ないよ〜」

はやくはやくと急かすリルに一応注意をするも耳に入ってない様子だ。

「あっ」

バタ、と頭から派手に転んでしまった。
すぐに助け起こして怪我が無いか確認したがコケた時に草で額を切ったらしく少し血が出ていた。

「あらら、おでこからちょっと血が出てるね」
「ごめんなさい…」
「ん、素直でよろしい」

そうしてリノはリルの額に手を翳(かざ)して回復魔法【ファーストエイド】

を発動させた。

「わぁ」

リノの翳(かざ)した掌(てのひら)が淡く光ったかと思うと既に額の傷は無くなっていた。

「これでよし、あのままじゃ可愛い顔が台無しだもんね」

ニカっと笑うリノ、しかし反応が返ってこないのでリルを見てみると目が輝いていた。

「魔法が使えるなんてお姉ちゃんすごい！」

「ふっふっふ、ボクだってやる時はやるんだよ」

「他にも魔法も使えるの？」

「もちろん」

他にもいくつか披露するとリルは「すごい！すごい！」と大喜びだ。

リルによると村で魔法が使えるのは村長だけなんだそうだ。

そんなこんなであっという間に目的地に到着した。

そこは広さで言えば高校の体育館ほどあり、中央に大樹が聳(そび)え立っていた。

「お姉ちゃんここだよ」

「ここかぁ」

早速リノはスキル【探索】を使用して周囲を見て回った。

エルフの特性で森が危険を教えてくれるので索敵は行わなかった。

「ん～特に変わったところはないなぁ」

一通り見て回ったが特に不審な場所はなく大樹の名前が『セフィロト』と分かっただけだった。
これ以上の収穫はないと判断してセフィロトにいるリルの元へ戻った。

「お姉ちゃんどうだった？」
「ん～特に気になるところはなかったわ」
「そっか」

結局なぜここで倒れていたのかは分からなかった。

「ん～ま、いっか」

リノはわからない事はいつかはわかるだろうって事にして先の事を考える事にした。
それからしばらくリルと二人で楽しく遊んで過ごした。

「そうそうリルちゃんにお礼をしないとね」

そう言うとリルはいっぱい遊んで貰ったから必要ないと首を横に振った。

「それはここに連れて来てもらった分でお相子、今度のは私を見つけてくれた分」

リノはポケットから透き通った青い石の付いたネックレスを取り出した。

「わぁキレイ」

「こんな物しかないけど良かったらもらってくれる？」
「うん！ありがとう」
満面の笑みで喜んでくれた。
「そのネックレスはね、リルちゃんに危険が迫った時に一度だけ守ってくれるのよ」
「そうなの？」
「そうなの、お守り代わりに持っていてね」
「わかった、大切にするね」
そう返事をすると早速リルはネックレスを首に掛けた。
「お姉ちゃんどうかな？」
「うん、よく似合ってる」
実はネックレスに付いている石は魔法石と呼ばれるものだった。
魔法石とは通常の鉱物とは違いその石自体に魔法力を付与する事ができる石だ。しかし付与できる魔法力はその魔法石の質に左右される。
今回ネックレスに付けた魔法石には防御魔法の【フォースシールド】が付与されている。
「それじゃ、そろそろ帰りましょうか」
「うん！」
二人は仲良く手を繋いで元来た道を戻っていった。

～自室～

森を抜けて宿屋の裏に出る頃には日が大分沈んでいた。
リノはマリナにネックレスを見せてくるというリルと別れ部屋へ戻った。

「ふぅ、結局手がかりはなかったなぁ」

バフとベッドに倒れこんだ。

「まぁでもリルちゃんと遊ぶのも楽しかったから良しとしましょうか」

そのままウトウトし始めるリノであった。

０２話：暖かな村人（後書き）

今更気がつきましたが周囲や人物の描写がまったくと言っていいほどありませんね。どうにかしないと…

０３話：商団到着（前書き）

スキルや魔法の名前は後々変更になる事があります。
というか改稿を繰り返すのでそれ以外も変更されてたりしますが（
汗

03話：商団到着

～宿屋前～

「お母さん、どこにいったんだろ」

厨房にもカウンターにもマリナの姿が無かったので外に出てみた。
すると村の入り口に大勢集まっているのが見えた。

「あんなに大勢でどうしたのかな？」
「あ、もしかして商団が着いたのかも」

普段でもあれだけの人数が集まるのは商団が来た時くらいだ。
しかし、集まるにしたってもう辺りが暗くなっている。

「あ、お母さん」

人だかりの中にマリナの姿を見つけたリルはマリナの元へ走って行った。

～村の入り口～

「お母さん？」

マリナの元に着いたリルだったがマリナの様子がおかしい事に気がついた。
顔が青褪めて今にも倒れそうだ。

「お母さん？」
「リル…お父さんが…」
「お父さんがどうしたの？

もう一度マリナを呼んでみたらリルに気がついた様だ。
しかしお父さんがと言ったきり何も言わなくなった。
マリナが同じ場所を見続けてる事に気がついたので目を向けてみる。

「え？お父…さん？」

リルは言葉を失った。
予想に違わず商団が到着したようだが護衛を勤めていた者たちはみな大なり小なり怪我をしていた。
だが問題はそこではない。リルが言葉を失ったのは王都へ出稼ぎに行ってる筈の父のロイがいたからだ。
しかもその顔は血の気を失い腹部には血だらけの包帯が巻いてある。
ロイの傍には詰め寄られる村長の姿があった。

「村長！本当にどうにかならんのですか！」
「…止血はしたが腹からの出血が酷い上に衰弱が激しい。正直なところもうわしの手には負えん」
「そんな！」

村長の言葉を聞いてとうとう気を失ってしまった。

どの村人にも苦悶の表情が浮かぶ。

「王宮の魔術師なら何とかなるんじゃろうが…わしでは高度な魔法は使えんし、さりとてこの村にはわし以外に魔法を扱える者がおらんし」

村長の悲痛な呟きを聞いたリルは宿屋にいる大好きなお姉ちゃんを思い出した。

「お姉ちゃんなら…！」

村長以外に魔法を使えるリノの元へ藁(わら)にも縋(すが)る思いで走り出した。

〜自室〜

その頃リノは船を漕いでいた。

ドンドンドンドン！

「うわ！何！？」

激しく叩かれるドアの音で一気に眠気が吹き飛んだ。

「お姉ちゃん！お姉ちゃん！」

と何度も呼びかけるリルの切羽詰った声を聞き慌ててドアを開けて事情を聞いた。

「助けて！お父さんが死にそうなの！」

「え？王都にいるっていうお父さんが？」

リノは森で遊んでる時にリルの父親が王都に出稼ぎに行ってる事を聞いていた。

「違うの！お父さん村の入り口にいるの！でも大怪我してて村長さんの魔法でも治せないって…」

「村には他に魔法を使える人がいないし、でもお姉ちゃんならって！」

そこまで息を荒くしながらも一気に話し終えた。

「なるほど、大体の事情はわかったわ。村の入り口ね？」

「うん」

「オッケーどこまで出来るかわからないけど後はお姉ちゃんに任せて休んでて」

そこまで言って一気に走り出した。

「お姉ちゃんお願い、お父さんを助けて…」

～村の入り口～

「ちょっとごめんなさい」

「あ、おい！なんだお前は！」

突然割り込んできたリノを怒鳴りつける人がいたが無視して村長の傍へ行った。

「リノさん、あんた」

「容態は？」

「かなり悪い、止血はしたが腹部からの出血による衰弱が激しい」

率直に現在の容態を聞いてくるリノに目を丸くしながらも答えを返す村長。

「わかりました。それじゃ少し離れてください」

それだけ言うと包帯を巻いた腹部に掌（てのひら）を翳（かざ）し魔法を発動させた。

掌を翳した部分から淡いオレンジ色の光が溢れ出す。回復魔法の【フェアリーヒール】だ。

「おぉ、なんという事じゃ」

と村長は驚き周囲の人達もどよめいた。

徐々に溢れ出していた光が収まっていく。

「ふぅ、これで一安心です」

そう言ってロイドから離れた。

その宣告通り腹部の傷は跡形も無く消え、顔には少し血の気が戻っていた。

「出血量が多かったようなので直ぐには動けませんが安静にしてれば数日で動けるようになりますよ」

「ほ、ホントに大丈夫なのか？」

周囲の人達が村長に確認を求めた。

村長が容態を確認するためロイへ近づいた。その間にリノは後回しになっていた怪我人の治療を済ませる事にした。

「うむ、これなら大丈夫じゃよ」

その返答を聞いた途端に周囲から喝采が起こった。

「良かった、本当に良かった」と涙ぐむ人や「やるじゃねぇか嬢ちゃん」と大笑いする人などで溢れかえった。

「これ皆（みな）の者、嬉しいのはわかるが他にも怪我人がいるんじゃからもう少し静かにせんか」

村の人みんな村長の言葉に素直に従っていく。

「それじゃ村長さん他の方の治療も終わりましたしボクはリルちゃんに教えてきますね」

「あぁ頼んだよ」

「ほら、そこの男共ロイとマリナも宿屋へ連れて行ってやんな」

「おうよ、任せときな」

そうしてリノはロイ夫妻と共に宿屋へ戻った。

～自室～

ロイ夫妻は他の村の人に頼んでリノは部屋で待つリルの元へ走った。

「ただいまリルちゃん」

ドアを開けた途端リルが抱きついてきた。

「お姉ちゃん！お父さんは！」

「おとと、リルちゃん落ち着いて」

それでもリルはリノを見上げたまま離れなかった。

「お父さんはもう大丈夫だよ」

そうリルに伝えると涙が溢れて零れ落ちた。

「おねえぢゃん…グス、ありがどう…」

「よしよし、よく頑張ったね」

頭をゆっくりゆっくりと撫でてやる。

「ほんどに…ほんどにありがどう…」

張っていた気が一気に緩んだのだろう。リルはリノに抱きついたまま眠ってしまった。

「あらら寝ちゃった」

安らかな寝顔に自然と微笑が浮かぶ。
起こさないようにベッドへ寝かせた。

「ゆっくりお休み」

すぐにスヤスヤと二つの寝息が聞こえてきた。
その後は何事もなく夜が明けた。

０３話：商団到着（後書き）

本当は０２話と一緒の筈でしたが分割しました。

０４話：お礼と恩返し

「んん、あ…れ？」

目が覚めたらいつもと違う天井が目に入った。

「あ、あたし寝ちゃったんだ…」

横を向くとリノが気持ちよさそうに眠っている。

「お姉ちゃん…」

「そうだ！お父さん！」

昨日は大丈夫だと言われてもやはり実際に見て話さないと安心できなかった。

リノを疑うわけではないがあの大怪我を見たらやはり不安なのだ。

起こさないように静かにドアを開け部屋を出て行った。

「ん…リルちゃん？」

リルが部屋を出て行って少ししたらリノが目を覚ました。

「あぁお父さんのところか」

と納得した。

「よっし、ボクも様子を見に行ってみようかな」

ベッドから降りて着替えを始めた。

「ん～人も増えたから一応装備をしておこうかな」

村の人だけなら必要ないのだが今日は商団の人達もいる。何よりあれだけの怪我人がいたという事は何か起きたとしか思えない。
そう思いいつもの冒険用装備へ着替えることにした。ちなみにリノのお気に入りの装備品には特殊効果が付与されているものもある。

「武器は…短剣でいっか」

アイテムボックスから一本の短剣を取り出し部屋を出た。

～宿屋～

コンコン

「おはようございます。リノです」
「開いてるよ」

と男性の声が聞こえたのでドアを開けて部屋入った。
部屋にマリナの姿はなかったがベッドの傍にリルと体を起こしたロイドがいた。

「あ、お姉ちゃんおはよう」

「うん、おはよう。ロイさんもおはようがございます」
「あぁおはよう」

リルはまた泣いたのだろう目は少し赤かった。
反対にロイの顔はまだ青白かった。

「話はリルに聞いたよ。君が助けてくれたんだってね」
「いえいえ、大した事はしてませんよ」
「そんな事はない、自分の体だあのままじゃ助からなかったはずだ」
謙遜するリノにロイは言った。

「本当にありがとう、また妻や娘に会えたのは君のお陰だ」
「はい、どういたしまして」

ロイが礼を言い頭を下げたのでリノも応じた。

「でも、実際リルちゃんが呼びに来なかったら危なかったですよ」
「そうなのか？」

ロイはリルに目を向けた。

「あ、うんお姉ちゃんが魔法を使えるのを知ってたのはあたしだけだったし…」
「うんうん、森でコケちゃった時にしか使わなかったからね」
「あーお姉ちゃんそれは言っちゃだめ！」

顔を赤くしてリルは抗議する。
ごめんごめんとリノは謝り話を続けた。

「そんなわけでボクはリルちゃんに呼ばれなきゃ商団が到着してる事すら知らなかったんです」
「そうだったのか、ありがとうリル」
とそこにいつものスープを持ってマリルが入ってきた。
「お、リノじゃないかおはよう」
「あ、おはようございます」
挨拶を交わしてロイの傍を離れてマリナと場所を変わった。
「ほれ、あんたそれ食べてさっさと元気になりな」
そう言って持ってたスープをロイへ渡した。
さてとマリナは姿勢を正してリノへ深々と頭を下げた。
「リノ、亭主を助けてくれて本当にありがとう」
「私達はこの恩を絶対に忘れないよ。困った事があったらいつでも頼っておくれ」
と今度は3人が頭を下げた。
「はい、その時は頼らせてもらいますね」
好意は素直に受けとる事にした。
「それじゃあボクは外にでも出てきます。ゆっくり休んでくださいね」
「あぁ本当にありがとう」

それじゃと言い残してリノは部屋を後にした。

〜宿屋前〜

宿屋から出るとちょうど村長が歩いてくるのが見えた。

「村長さんおはようございます」

「あぁリノさんか、おはよう」

挨拶を終えたところで村長に昨日の事を聞いてみた。

「村長さん、結局昨日は何があったんですか？」

「ん？あぁどうやら村の近くで盗賊に襲われたらしんじゃよ」

「え！？近くで盗賊が出るんですか！？」

「最近住み着いたみたいなんじゃよ」

驚いているリノを尻目に村長は話を続けた。

「王都の騎士団と冒険者ギルドには討伐の依頼は出しておいたんじゃがどうやら間に会わなかったみたいでな」

「そうなんですか、でも騎士団とかは簡単に動かないと思いますけどね」

「じゃろうな、王都周辺か大きな問題が起きない限りは貴族連中が動かさんじゃろうからな」

やはりどこに行っても貴族は堕落してそうだ。

「冒険者ギルドの方はどうだったんですか？」

「そちらもあまり期待は出来ないじゃろう。王都から遠い上に見ての通り貧しい村じゃからほとんど報酬が出せん」

「それで結局盗賊が野放しになるんですか…」

リノは世知辛い世の中だと思った。

「ほっほっほ、それよりも昨日の魔法は実に見事じゃったな」

村長はリノの表情が翳（かげ）ったのを見て話題を変えた。

「え？あ、あぁそんな事無いですよ。村長さんが止血をしてなかったら手遅れになるところでしたし」

「謙遜せんでもええ、あれほどの魔法は見た事なかった」

リノには村長の目が怪しく光って見えた。

「いやぁそんな事ないんじゃないかな」

「是非とも詳しい話を聞きたいところじゃ」

ずずずと迫ってくる村長に対しざざざと後ずさるリノであった。

「ボクこれから用がある気がするので失礼します！」

「あ、こら待つのじゃ！」

村長の下から全力で逃げ出すリノであった。

～広場～

「はぁ、村長さん目が怪しすぎるよ…」

とりあえず村の広場まで逃げてきたが実を言うと広場から宿屋までは目と鼻の先だったりする。
宿屋の方を見ると村長は宿屋に入るところだった。おそらくロイの様子を診に来たのだろう。

「お、あんた昨日の魔導師じゃないか」

と後ろから声を掛けられた。振り返ってみると歴戦の戦士を思わせる男性とメガネを掛けたケット・シーの男性が立っていた。

「えーと、あなた方は？」

昨日はロイを助けるのに集中していて商団や護衛の人たちの顔を見てなかった。

「おっとすまねぇ、俺は護衛を勤めるギルド『シースパロー』の団長、ハンスだ」
「私はこの商団のまとめ役を担ってますランドといいます」
「ハンスさんとランドさんですね。ボクはリノといいます」

それで？と目で続きを促した。

「昨日はみんなが世話になったからな。礼を言いに来たんだ」

そう言うと2人は頭を下げて礼を言った。

「いえいえお気になさらず」

リノがそう言うともう一度礼を言いハンスはメンバーの元へ歩いていった。

ランドも場所の方へ向かっていった。

「あ、ランドさん」

「はい？」

「もう商品の方は見れるんですか？」

「もちろん」

と聞いてみると直ぐにでも見れると即答した。さすがは商人だ。

「それじゃあ折角ですし見させてもらって良いですか？」

「はい、是非とも」

そういって馬車の近くで広げられていた露天へ連れ立って歩きだした。

「あ、お姉ちゃん」

とそこへリルが走ってやってきた。

「リルちゃんどうしたの？」

「お姉ちゃんにこれを渡そうと思って」

そうしリルが持っていた袋を渡してきた。
中身はマリナ特性のサンドイッチとの事だった。

「あ、そういえば朝ごはんまだだった」
「お母さんが後回しなってごめんだって」
「そっかぁ気にしなくていいのに」

でもありがたかった。

「それじゃあねお姉ちゃん」
「うん、お仕事がんばってね」

そう言ってリルは宿屋に戻っていった。
少し離れて待っていたランドが寄ってきた。

「どうします？朝ごはんの後からでも私は構いませんが？」
「ん～それじゃあまた後で寄らせてもらいますね」
「はい、場所は馬車の周りですので」

「では失礼します」と言いランドは馬車へ歩いていった。

「よし折角だから森で食べよっと」

そうしてリノは森へ向かった。

～大樹セフィロト～

「んー」

思いっきり伸びをしながら辺りを見渡す。

「ここは気持ちがいいなぁ」

サワサワと葉っぱの擦れる音や鳥の声、様々な自然の音が重なり一つの音楽のようになっていた。

「さって早速いただきますか」

マリナ特製のサンドイッチを広げて食べ始めた。

「む！これは美味しい」

一口食べただけで幸せな気分にしてくれた。

黙々と食べ続けるリノであった。

「は！？もう無い！？」

気がついたら手元にはサンドイッチを包んでいた袋だけになっていた。

「あぁまた作ってくれないかなぁ。でもお肉が手に入らないか…」

「今度レシピでも教えてくれないか聞いてみよ」

この際自分で作ってみるのも有りかと思うリノであった。

「ふぁ～眠くなっちゃった…」

いつしかリノは眠っていた。

０４話：お礼と恩返し（後書き）

仕事中に書きたい事はたくさん思い浮かぶのにいざ書こうと思うと全然言葉に出来ないですｏｒｚ

05話：あやふやな真実

～大樹セフィロト～

ペロペロ

「ん、んん…」

なんだか頬がくすぐったい。

「あ、ダメよシンお姉ちゃん起きちゃうでしょ」

「ん…リルちゃん？」

目を開いたらそこにはシンを抱いているルリがいた。

「ごめんなさい。起こしちゃった？」

「あ、ボク寝ちゃったんだ」

辺りを見渡し最後に空を見上げた。太陽は昇りきっていた。

「もしかしてもうお昼？」

「うん」

「あちゃー寝すぎちゃったか」

優に４時間は寝てたようだ。

「ところで胸に抱いてるのは？」

「あ、この子は友達のシン。ほらお姉ちゃんに挨拶して」

そう言ってリノの方へ近づけてきた。
「ボクはリノって言うのよろしね」
そう名乗ったリノはシンの反応で凍りついた。
「存じています。リノ」
そうシンが返したからだ。これにはリルも驚いている
「シ…ン？」
シンはリルの声には反応せず話を続けた。
「私はリノ、貴女をこの世界に呼んだ者です」
「！？」
それを聞いてリノは愕然としリルは何の話かわからずキョトンとしていた。
「正確には貴方達と言った方が良いでしょうね」
「それは…ボク以外にも呼ばれたのがいるって事？」
「はい、貴女以外にもマイスター含め１９人程いましたが」
やはりそうだった。しかし１９人もいたのは驚いた。
「貴方達を呼んだのは魔族との戦争を終結させるためでした」
「え？でもここは戦争が終わった後の世界じゃ？」
「えぇその通りです」

「じゃあなんでボクはここにいるの！？」
おかしな話だった。他の人達は１００年前に呼ばれたのにリノだけはこの時代に呼ばれるのは変だ。
「疑問は尤(もっと)もです。ですが実際に魔族との戦争にあなたも参加しているんです」
「ありえない！ボクにそんな記憶はないもの！」
「のようですね。ですがこれは間違いありません」
話が全然わからなくなってきた。呆然としてるリノを尻目に話を続ける。
「２０人の活躍で魔族の大多数を退ける事に成功しました。しかし戦争の終盤に問題が起きましたのです」
「え？」
「エトスの防衛をしていた貴女が行方不明になりました」
さらに衝撃の事実だ。
「推測になりますが、当時エトスは魔族の中でも最も強靭と言われたアモンと殺戮の達人といわれたカーシモラルによる攻撃が熾烈(しれつ)をきわめました」
「…」
「そしてそのうちのアモンが突如として消滅したのです。奇しくも貴女が行方不明になった時に、です」
「まさか…」
「いえ、あくまで推測でしかありません」
もう推測だろうが何だろうがリノは混乱しっぱなしだ。

「ここまでは良いですか？」
「正直もうわけがわかりません。もう取り敢えず簡潔に言って貰えますか？」
「…わかりました」

とりあえず簡単にでも聞いて質問する事にした。

「魔族に負けそうだったので強力な助けとして２０人を召喚しました。２０人の働きは予想以上で大半の魔族を打ち滅ぼしました。しかし一番魔族の攻撃が集中していた首都エトスで異変が起きました。なんとエトスを防衛していた貴女と魔族で最も強靭なアモンが突如として行方知れずになってしまったのです。その隙を狙われ首都は陥落、都市機能も住民も喪失してしまいました。他の魔族を退け駆けつけたマイスターによって首都を奪還する事に成功しました。しかし消耗が激しかったため殲滅するには至らずカーシモラルを始め残った魔族の大半を神樹の社へ封印し人魔戦争は終戦しました」

シンは召喚した経緯から終戦までを一気に話終えた。

「…だいたいわかりました。いくつか聞きたい事があります」
「どうぞ」

どうにか頭の中を整理していくつか質問した。

「まず、なぜボクたちが選ばれたんですか？
「それはこの世界と貴女の仮想世界が殆ど同じだったからです」
「同じ？」
「はい、歴史や使用している魔法や技能、種族や都市他にも様々なものが同じなんです。無論細かいところで違いはありますがね」

「そんなにですか！？」

いくら何でもそこまで同じって事はないはずだと思った。

「ちなみにこの世界を住民達はリヴィエラと呼んでいます」

同じだ、リノが今までプレイしていたＶＲＭＭＯ東風のリヴィエラと。

「選ばれた事についてはわかりました」

無理やり納得させて質問を続けた。

「それじゃ終戦後に召喚された２０…１９人はどうなったんですか？」

これは重要な質問だ。

「皆さん元の世界へ召還しました。その際に魔族の脅威に備え存在をこの世界へ留まってもらいました」

「え？存在を留めるって？」

「簡単言えばコピーですね。記憶も人格も能力も引き継いだクローンとでも言えばわかりやすいでしょうか」

「えっと…つまりキャラデータをコピーしてオリジナルはボクの世界でコピーはこの世界で生きてるって事でしょうか？」

「はい、そうなります」

「なんかもうデタラメだよ…」

クローンとかもう理解できない。

「あ、でもそれならボクも元の世界へ帰れるの？」
ビクリとそれまでおとなしく話を聞いていたリルの体が震えていた。
しかしリノはそんなリルの様子に気づく事はなかった。
「それが…すみません。無理なんです」
シンの首が力なく左右に振られた。
「なんで！みんなは帰せてボクは無理なの！」
「本当にすみません、私にもうそこまでの力が残っていないんです」
「そんな…」
一縷の希望も砕かれてしまった。
「勝手な話だという事は重々承知しておりますが貴女にはこのままこの世界で生きてもらうしかありません」
「そう…ですか」
「お詫びにもならないですが私の残りの力を差し上げます」
そういうとシンの体が光り次いでリノの体が光に包まれた。
「力の使い方も併せてお譲りしたので説明は割愛します」
「…」
「どう生きるかは貴女にお任せします」
「はい…」
「私がいうのも烏滸がましいですがこの世界で前向きに生きてください」
「…」
「私の名はセフィロト、他にも聞きたい事があればこの霊獣と共に

ここへ来て頂ければお話できます」
「はい…」
「それでは」
そこまで言うとシンはキョロキョロと辺りを見渡してリルの腕から飛び出していった。
「お姉ちゃん…」
リルは沈みきったリノにどうしたら良いかわからず立ち尽くしていた。
「そっかぁもう帰ることはできないんだ…」
ポツリとリノは呟いた。
「お姉ちゃんごめんなさい」
その呟きを聞いたリルが突然謝ってきた。
「リルちゃん?」
何故リルが謝るのかさっぱりわからない。
「お話はよくわからなかったけど、お姉ちゃんがここからいなくなるって聞いていなくなっちゃイヤだと思ったの」
「…」
「でもその後帰れないって、ここにいるってわかったら凄くホッとした。お姉ちゃん帰れなくて凄く辛い筈なのに!」
「リルちゃん…」

「あたし自分がこんな嫌な子だなんて思っても見なかった」
リノには帰る場所がある、だがリルはそれでもリノにいて欲しいと思ってしまった事で自己嫌悪になっていた。
「だからごめんなさい」
とうとうリルの目から涙が溢れ出した。
「良いのよリルちゃん」
そういってリルが泣き止むまで抱きしめた。
しばらくするとリルが離れた。
「お姉ちゃんごめんなさい、それとありがとう」
「うん、どういたしまして」
目元が赤かったがもう泣いてはいなかった。
「ま、帰れないってわかっただけ良しとしましょうか」
と殊更(ことさら)明るく言い放つ。
「お姉ちゃん…」
「そんな顔しないの、とりあえずどうするかはまた後で考える事にするから。今は…そうね露天にでも行きましょうか」
ね？と笑顔でリルへ提案する。
「…うん！」

そうして2人は手を繋いで仲良く村へ戻っていった。

０５話：あやふやな真実（後書き）

文字数が少ないから割と早く出来上がってしまいます。

０６話：過去と現在

～トレントの森～

「ところでお姉ちゃん」
「ん？なにかな？」

もう少しで森を抜けるところにきてリルは疑問に思ったていた事を聞いた。

「お姉ちゃんはここことは違う世界から来たんだよね？」
「ん～殆どは同じって言ってたけどそうなるかな」
「しかも１００年以上前」
「そうなるね」
「じゃあたしよりもずっと年上？」
「ま、まぁそうなる…ね」

なんだかリルが言いたい事がわかってきた気がする。

「じゃあお姉ちゃんじゃなくてお婆ちゃんって呼ばなくちゃいけないの？」

やっぱりそうきた。

「いや、さすがにお婆ちゃんはやめて欲しいかな。いつも通りでお願い」
「うん、それじゃお姉ちゃんで」

特に意地悪をするわけでもなく素直に従った。

「リルちゃん、今回の話はボク達だけの秘密にしておいてくれないかな？」

「お母さん達にも？」

「ん～まぁマリナさん達には構わないよ」

「うん、わかった」

リルが良い子で良かったと安堵するリノであった。

やはり異世界がどうのという話は説明が面倒だからだ。

「あ、じゃあもしかして使ってるお金は違うのかな？」

「あ゛」

いままで気にしてなかったが確かに使えるかどうかわからない。

一度取り出してみることにした。

「えっと、ボクが使ってたのはこれ」

「へぇこんな風になってたんだ」と思い取り出したの硬貨は1枚そこには雄々しい鷲の姿が刻んであった。

それをリルへ渡した。

「どうかな？」

「うーん、どこかで見たことがあるような気がする…」

リルは首を傾げた。

「お姉ちゃん、これお母さんに見せてきていい？」

「うん、いいよ。ボクはもう一度確認も兼ねて大樹へ行くよ。」

そうして2人は別れた。

～大樹セフィロト～

「おーい、セフィロトやーい」

呼んでみたがシンがいないから話はできないかもと今更思った。

「もう来たのですか」

気がついたら足元にシンがいた。

「ちょっと聞きたい事ができたからね」

「なんでしょうか？」

大樹の根元に一人と一匹が座って話し始めた。

「1つアイテムボックスやステータスウインドウについて、2つスキルと魔法について、3つ終戦後のマイスター達について聞きたい」

「わかりました。その前にその口調をやめたらどうですか？結構窮屈そうですが」

思わぬ提案にちょっと驚いた。

「良くわかったわね。っても結構おかしいところがあったか」
たははは、といつもの口調の戻した。
「変えてた理由は特に聞きませんので話を続けますね」
「その方が助かるわ」
大した理由はなかったが説明も面倒だったのでセフィロトの申し出は助かった。
そしてセフィロトは話を続けた。
「まずアイテムやステータスについてですが、これは突然呼んでしまったマイスター達に対してのせめてもの配慮です。今まで慣れ親しんでいたものがまったく使えなくなったらいくらマイスターといえども即応は難しかったでしょう。ですのでこの世界でも使えるようにしました」
「そんな事よく出来たわね」
「詳しい説明が要りますか？」
「いや、多分良くわからないと思うから遠慮しておくわ」
多分といったが絶対わからないに違いないので割愛してもらった。
「ちなみに現在開ける数に限りがあるのはご存知ですよね？」
「えぇわたしが確認したので４つね」
「本当なら全てを再現したかったのですが力の限界で不可能でした」
「あ、そうだったの」
「地図もありますが現在の貴女では地図が対応していないので開けません。これは地図を手に入れれば解消します」
「なるほどね」

後でランドさんにでも聞いて見ることにする。
「あと貴女には専用の拠点(ホーム)がありましたよね？それもこちらに存在します」
「え？拠点(ホーム)もあるの？」
「はい、こちらは中を再現できたのですが入り口を再現できませんでした」
「ダメじゃん」
入り口が無いのであればそれは存在しないのと同じだ。
「ですので、これをお渡ししておきます」
「指輪？」
いつの間にかシンが指輪を運んできていた。
「それを使えばいつでも拠点(ホーム)へ入れます」
「へぇそれは便利ね」
指輪を眺めていたリノはシンの方を向いた。
「では次にスキルと魔法についてですが、これも1つ目の質問と同じでこの世界でほぼ再現されています。再現できなかったのは天空の園庭で入手できるスキルなどです」
「あぁ、そうなんだ」
「はい、個々人で発動するには負荷が掛かりすぎて体の方が保たない事がわかったのです」
「なるほど」

そこら辺はステータスと関係してるのか疑問に思った。

「なので神器という形で解決しました」

「って解決できたんだ…」

「はい、誰でも使えるというわけではありませんが」

当然だ。そんな事になったら世界大戦が勃発するかもしれない。

「使える条件は？」

「神器を扱えるのなら特には無いです」

「今の時代に神器を扱える人はいるの？」

「いいえ、現在まで１人も現れてません」

「なるほどね、それじゃあいつかは装備が可能になるわけ？」

「はい。この世界では全ての住人にＬｖがありますので可能です」

納得したリノを見てセフィロトは話を続けた。

「通常のスキルや魔法に関しては前の世界で使用していたものをそのまま使えます。生産系や料理系などのスキルも前の世界で作成したものは全て材料を揃えれば作成可能です」

「なるほどね、ちなみに材料とかも前と同じなの？」

「大体そうですね。中には戦争によって失われたものもあると思います」

ふぅと溜息が漏れた。

「少し休みますか？」

「いえ、続けてちょうだい」

セフィロトは休みを提案したがリノは先を促した。

「この世界では魔法や装備、アイテムなどを自作できます」

「そうなの？」

「はい、こちらは現実であって仮想ではありませんのでシステムの制約を受けません」

考えれば当たり前の話だった。元の世界はあくまでシステム上で動くゲームでしかない。

それだけにシステムで規定されてない事はそもそも出来ないからだ。

しかしこの世界は現実である。

「ちなみに一度作成した物のレシピを残しておけばスキルを駆使して作成できます」

「かなり便利ね」

現実ではあるがここら辺はかなりデタラメだ。

「それでは最後のマイスター達についてです」

この世界に残ったのがコピーだとしても記憶も同じならリノの事を覚えてるかもしれない。

「終戦後マイスター達は防衛を担当した国もしくは都市で高い地位を与えられ生きていきました。そして現在召喚したマイスターで生きている者はいません。既に召喚した時代から２００年近く経っていますので寿命です」

「はぁ～」

わかってはいたが気落ちせずにはいられない。

「ですが子孫は全員生きています」
「ん～子孫ってもわたしにはもう別人だし」
そう、結局リノが知ってるのは当時のマイスターだけだ。
「すみません訂正します。2人だけマイスターではなく直系ですが王都に貴女の世界から召喚した人物がいます」
「え？そうなの？」
「はい、誰なのかはわかりませんが現在も生きているという事はエルフかドワーフの可能性が高いです」
リヴィエラに生きている種族で最も長寿なのは既に全滅したといわれるハイエルフ。次にエルフ、ドワーフの順だ。
「以上で終わりです」
「ん、ありがと。これからの事を考えるのに役立つ情報だったわ」
そういってリノは宿屋へ戻ろうとした。
「最後に私が譲渡した力のうち召喚はもう使いましたか？」
「いえ、まだだけど」
まだ力をもらってそんなに経っていない。
「でしたらこの霊獣と契約を結んでみてはどうでしょうか？」
「シンと？」
「はい」
これは想定外の申し出だった。

確かにセフィロトから受け取った力に召喚能力（分類は魔法になっていた）があるが契約リストである魔道書は白紙状態だ。

「私を訪ねたときにこの子がいないと話ができませんからね」
「確かにそうだけど、シンはいいの？」
「はい、既に了承を頂いています」
「そっか」

それなら別段断る理由はないし試してみるのもいいだろう。

「それじゃお願いするわ」
「使い方は教えた通りです。ではどうぞ」

そうしてリノは目を閉じシンへ手を翳（かざ）した。リノの脳裏にシンのパーソナルデータが次々と浮かんだ。
最後に魔道書にシンのデータが追加され契約完了だ。

「ふぅ、これで契約完了ね」
「はい」
「ところで召喚する時の掛け声っていわなきゃダメ？」

そう、この召喚術は使用するのに掛け声が設定されている。

「ダメです。その一文には意味を持たせてありますので」
「うぅ言わなきゃダメか…」

普段言わない掛け声なんかはやっぱり恥ずかしさがある。

「まぁ仕方がないか。それじゃ聞くことは聞いたしわたしは行くね」
「はい、何かあればまたどうぞ」

そうして今度こそリノは宿屋へ戻っていった。

０６話：過去と現在（後書き）

説明が続いて退屈ですね。すみません。
こんな筈ではなかったんですが…

07話：理解者そして家族

〜宿屋〜

コンコン

「リノです」

「あ、お姉ちゃんどうぞ」

ドアの向こうからリルの声が聞こえたのでドアを開けた。

「失礼しますね」

部屋に入るとロイとリルしかいなかった。

「あれ？マリナさんは？」

「あぁ君の姿が見えたからって厨房へ行ったよ」

「お姉ちゃんお昼まだだったでしょ？」

どうやら気を使わせてしまったようだ。

「そうでしたか、リルちゃん話はどこまで？」

「あたしじゃ上手に話せないとおもったから、さっきのお金の話だけ」

そういえばお金について聞いてもらっていた。

「ん、わかったわ。それでどうだった？」

そうリルに聞くとロイから返答があった。

「あれは王家の紋章だね」

「そうなんですか？」

「あぁここら辺じゃほとんど見ないけどね」

「それで普通に使えますか？」

「そりゃ使えるけど」

そんな事も知らないのか？という顔をされた。

「あ、後で事情は話します」

「そうか、それじゃ今は何も聞かないでおこう」

「ありがとうございます。それでお金についてですが」

「あぁそれじゃ簡単に説明しておこうか」

そうしてロイの通貨についての解説が始まった。

「まず現在使われている硬貨には６種類ある」

「そんなにも…」

「１Ｒ（リン）が男爵の紋章、５０Ｒ（リン）が子爵の紋章、１００Ｒ（リン）が伯爵の紋章、５００Ｒ（リン）が侯爵の紋章、１０００Ｒ（リン）が公爵の紋章、そして１０００Ｒ（リン）が王家の紋章が刻まれている」

「細かく分けられてるんですね」

「何故そうなったのか不明瞭なんだけどね」

「覚えるのが大変そう…」

「まぁ使っていけば直ぐに覚えるよ」

と、そこへマリナがスープを持って入ってきた。

「ほいよリノ。あんた昼まだだったろ？」
「わざわざありがとうございます」
受け取ったスープを早速食べ始めた。
「それで何の話をしてたんだい？」
「通貨の説明をね」
「そうかい」
「ご馳走様でした」
「って早いね！？」
マリナとロイの短い会話の間にスープを平らげてしまった。
「リルちゃんは既に知っていますが、お2人を信頼してお話があるんです今良いですか？」
「あぁ僕は構わないよ」
「改まって何の話だい？」
2人は聞く体勢になった。
リノは自分がマイスターである事、戦争終結の為にこの世界へ呼ばれた事、その戦争中に行方不明になったらしい事、開戦直前からの記憶が無くトレントの森へどうして現れたか分からない事、元の世界へはもう帰れないなどを話した。
「そうだったのかい…」
「まさかマイスター達が別の世界の住人だったなんて…」
2人はそれぞれ違う表情をしていた。
「ですのでこの時代についてほとんどわからないんです」

「なるほどだから通貨の事を聞いてきたんだね」
「出来ればこの事は秘密にしておいて欲しいんですが」
「あぁわかった決して口外しないと誓うよ。話してくれてありがとう」

合点がいったとロイは頷いた。マリナは話してくれたことを喜んだ。

「ま、あたしらはあんたが何者でもあんたの味方だよ」
「そうだな」
「うん！」

そんな3人にリノは嬉しくなった。やはり知らない世界で一人ぼっちというのは苦しいものだ。
しかし自分の事を知っていてさらに助けてくれる人たちがいる。とても嬉しい事だ。

「皆さんありがとうございます…」

リノは溢れそうになる涙を堪えた。

「気がついたらまったく知らない場所で知ってる人は誰もいない。わたし一人でどうしようかって思ってて…」
「そしたらもう二度と帰れないって…でも、泣いててもダメだって…グス…そう思って」

とうとう涙が零れ落ちた。マリナは嗚咽するリノを抱きしめた。

「あたし達はあんたと出会ってまだ数日しか経ってない。だけどね、あんたがあたし達を信頼できると思ってくれた様にあたし達もあんたを信頼してるんだ」

そのままの姿勢で優しく語り続けた。

「だからね、泣きたい時は泣いてもいいし甘えたいときは甘えてくれてもいい、困った時はいつでも相談してくれていいんだよ」

いつしかリノは泣き止んでいた。

「確かにあたし達じゃ役不足だろうけど一人で抱え込むより話した方が良い時だってある」

そしてマリナを見詰める。

「それにあたし達はいつだってどんな時だってリノ、あんたの味方だよ。いやあんたさえ良ければ家族と思ってくれても良い」

「そうだな」

「うん！」

ロイとリルも同意する。そしてマリナはリノの目を真っ直ぐ見て笑いかけた。

「マリナさん…味方と言ってくれて、家族と言ってくれて、本当にありがとうございます」

リノは深々と頭を下げた。そして顔を上げたリノの表情はどこか吹っ切れたようだった。

「さて、それじゃリノさん話を通貨に戻すけど」

「あ、リノで構いません」

「じゃあリノ、君が戦前の人間なら持っている硬貨は全て王家の紋

章って事になるのかな？」
話を通貨に戻してロイは疑問を口にした。
「多分そうなんじゃないんですかね。出してみましょう」
そうしてリノはテーブルに現在の所持金１３４０Ｒ（リン）を広げた。
「は～こりゃ凄いね」
「確かにこれだけの額が目の前にあるなんて…」
「え～とだからこれでどのくらいの額になるんでしたっけ？」
イマイチ理解してないリノは２人に聞いてみた。
「１３４０万Ｒ（リン）になるね」
「ぶはっ」
改めて聞くととんでもない額だということに気がついた。
「はっはっは、貴族並みの財産だ」
「お姉ちゃん凄いね」
「あはは…」
とマリナとリルは笑った。
所持金はそれだけなのだが拠点（ホーム）の金庫には笑えない金額が入っている。
「ま、まぁいいや」
なるべく使わない事にしようと心に決めた。

そうしてしばらく話を続けた。

「さて、そろそろ晩ご飯の準備を始めようかね」

そういってマリナが立ち上がった。外をみると夜の帳(とばり)が下り始めていた。

「あ、もうこんな時間なんですね」

「お母さん手伝うね」

そうしてマリナとリルは部屋を後にした。

「それじゃわたしも何かお手伝いを」

「リノ」

腰を浮かしたところでロイが呼び止めた。

「色々あって疲れたろうから君は手伝わなくても良いよ」

「え？でも…」

「肉体的に大丈夫でも精神的に疲れてるだろう？」

「う…」

年の功と言うべきだろうか見事に見抜いていた。

「はい、それじゃあ部屋で大人しくしてます」

「よろしい」

そういって今度こそリノは部屋を後にした。

～自室～

「ふぅ」

夕食を食べ終わったリノはベッドへ倒れこみ人心地付いた。

「家族…か」

マリナが家族と言ってくれた事がとても嬉しかった。

「でも、良かったわたしの話を信じてくれて」

やはり別世界などの話をする時は怖かった。
普通別世界から来ましたなんて話しても頭がおかしいとしか思われないだろうからだ。

「明日は何か手伝えたらいいな…」

そうしてリノは眠りへ落ちていった。

０７話：理解者そして家族（後書き）

なんだかシリアス風な展開に…それにしても通貨が面倒ですね。

08話：魔法石とスクロール

～宿屋前～

「ん～今日も良い天気！」

手で太陽を遮って空を仰ぎ見た。

「お待たせお姉ちゃん」

リルが玄関から出てきた。

朝食後にマリナからリルと露天に行ってみたらどうかと提案があった。

「それじゃ行きましょうか」

「うん」

連れ立って露天へ向かった。

～露天～

「あ、リノさん」

露天の近くまで行くとランドが顔を出した。
そこで昨日ランドに後で行くと言ってたのを思い出した。

「ランドさん、昨日は行くといって行かないですみませんでした」
「いえいえ、謝るような事じゃありませんよ」

ランドは特に気にしてないようだ。

「今日は何をお求めで？」
「特には、とりあえず見てみようと思いましてね」
「そうですか、何かありましたら声を掛けてください」

そう言ってランドは離れていった。

「へーいろんな物があるのね」
「うん、大体は食品や生活用品がほとんどなんだけど時々珍しいものもあったりするよ」
「珍しいもの？」
「客寄せ用らしいからランドさんに言えば見せてくれると思う」

折角なのでランドに聞いてみた。

「ん～今回は王宮御用達の鍛冶ギルド「ヴェルンド」の鍛えた武具ですね」
「王宮御用達って事は国一番の鍛冶ギルドなんですか？」
「そうです、中でも鍛冶頭であるレオンハルトの作品は他(た)の追随を許さない程です」
「は～それは凄いですね。ちなみに鍛冶頭の作はあるんですか？」
「鍛冶頭の作品は滅多に無いんですが運の良い事に短剣があります」

ランドは短剣をリノに見せた。

「スティレットの類(たぐい)ですか、見せて貰っても構いませんか？」

「どうぞ」

リノはランドから受け取った短剣にスキル【解析(アナライズ)】を使用した。

「ん～、確かに良い短剣ですね」

補正値も耐久度もかなり高い、適正Ｌｖならｌｖ６分は上乗せできるかもしれない。元の世界でもこれだけ鍛えれる人はそんなにいないだろう。

「ありがとうございました」

そうしてランドへ短剣を返した。

「ねぇねぇお姉ちゃん」

「何？リルちゃん？」

「これって何かな？」

そういって持ってきたの少し歪な石だった。

「それは魔法石ですよ」

答えたのはランドだった。

「へーそうなんだ。でもあんまりキレイじゃないのね」

「まぁそれは最低ランクの魔法石ですし」

「そうなの？」
「はい、上質な物ほど透明度が高くなるんです」
ランドがリルの疑問に答えたのでリノは他の商品を見ることにした。
「ん？リルさん、リルさんのしているネックレスに付いているのは？」
「これ？見ます？」
「…」
「ランドさん？」
ランドが凍った。
「リルさん！これは一体どこで手に入れたんですか！」
「きゃっ」
ランドはリルに迫った。
「はい、ストップ」
リノは小さい悲鳴が聞こえたので割り込んでランドを制止した。
「どうしたんですか」
「は！私とした事が…すみませんでした」
平謝りをしてくるランド。それを見てリノは見ていた商品の元へ戻った。
「コホン、さてリルさんこれは魔法石です。しかもこれは最高ランクの」

「そうなの？」
「はい、現存してるものは殆どないです」
そういって魔法石の話を始めた。
「魔法石の質は透明度によるとお話しましたよね」
「うん」
「分類すると5段階あって、ランク1が0～1割が透明で、ランク2が全体の2～3割、ランク3が4～6割、ランク4が7～8割り、ランク5が9～10割（ほぼ透明）となります」
「それじゃこれはランク5？」
「そうなりますが、現在は自然物の魔法石は最高でもランク4、人口物でも特殊な精製方法でランク3が限界です」
「え？じゃあこれは？」
「まさに人工遺物（アーティファクト）、現在の技術では再現不可能ですので戦前のものでしょうね。この目で見れるとは思いませんでしたよ」
ランドは繁々とネックレスの魔法石を見つめていた。
「それでリルさんこれはどこで？」
「これはお姉ちゃんにもらったの」
「ん？呼んだ？」
2人から離れて商品を見ていたリノが呼ばれた気がして寄っていった。
「リノさんがこの魔法石の持ち主だったんですか？」
リルに借りてるネックレスを差し出した。

「そうですよ、ネックレスにしてリルちゃんにあげたんです」
「失礼ですが何故リルさんへ渡したんですか？この魔法石は現在じゃ入手不可能な物なのに」
「ありゃそうなんですか？でもリルちゃんへのお礼ならそのくらいでも足りないくらいですよ」
何でもない風に言われてランドは呆気に取られた。
「億出しても買えない物で足りないくらいのお礼って…」
「わたしにとってそれだけ感謝してるって事ですよ」
「そんな、あたしの方こそお姉ちゃんには感謝してるのよ」
いつまでもこの話が続きそうなので「この話はおしまい」とリルに伝えた。リルもわかったようで頷いた。
ランドはそんな2人をみてこれ以上話を続けるのを止める事にした。
「しかし、そうするとこの魔法石は危険ですね」
「そうですね、盗賊が聞き付けたら狙われるでしょうね」
近くでと盗賊が出没する以上危険すぎる代物だ。
「うーん、リルちゃんごめんなさい。一度あげたものだけどこの魔法石は返してもらえるかな？」
「え…」
「このままじゃ盗賊に狙われて大変な事になるかもしれないの」
「…」
「そうね、それじゃ他に用意しておくから交換しましょ？」
「…お姉ちゃんがそう言うなら」
リルは少し不服そうだが了承してくれリノはネックレスを受け取っ

た。
話が終わったところでランドが話しかけてきた。
「そういえばリノさんの魔法は見事でしたね」
「いえいえ、そんな事はないですよ」
と村長と同じ話題になりそうになったが。
「あれだけの魔法が使えるリノさんには不要かもしれませんがこんなものもありますよ」
しかし、そこは商人ランド別の場所から巻いた羊皮紙を取り出した。
「スクロールですか」
「スクロール？」
リルは首を傾げた。
「スクロールって言うのは誰でもそこに書いてある魔法を使えるようになる便利な道具よ」
「それじゃあたしも使えたりするの？」
「うん、でもその魔法を使えるだけの魔力が必要になるけどね」
「そっかぁ、あたしじゃダメかな…」
リルは残念そうだ。
「ちなみにいくらするんですか？」
「これは3万Rですね」
「結構しますね」

庶民派リノには高い金額だ。

「スクロールを書けるのが王宮の魔導士か王立学園の魔導師くらいで数が少ないんですよ」

「そうなんですか、うーん折角だからリルちゃんに使ってみて欲しかったんですが…」

うぬぬとリノは考え込んだ。

「そうだ、羊皮紙売ってますか？」

「えぇありますよ」

そういってランドは羊皮紙を取り出した。

「１００Ｒになります」

「あ、ごめんなさいリルちゃんお金ある？」

「え？うん」

リルが代わりに払った。

「ランドさん書くもの貸してくれませんか？」

「どうぞ」

一体何が始まるのかリルとランドは顔を見合わせた。

「リノさん一体何…」

ランドの言葉を遮りリノはスキル【速記】と【スクロール作成】を発動した。

「よっし、これでいいかな」
最後に記載者を記し書き終わった。
「はい、リルちゃん」
「お姉ちゃんこれは？」
「ん？ファーストエイドのスクロールだよ」
そうして手渡した羊皮紙はスクロールになっていた。
「え？ダメだよお姉ちゃん」
「それはリルちゃんのお金がで買ったからリルちゃんのだよ。わたしはちょっと落書きをしただけ」
リノはそう言うとそっぽ向いた。
向いた先ではランドが口を開けて呆れていた。
「リノさん…あなた一体何者ですか」
最高ランクの魔法石やスクロール作成などを軽くこなすリノの正体が気になった。
「ん？わたしはわたしですよ？」
「いや、そんな謎掛けじゃないんですから」
ランドは食い下がってきた。
「ランドさん」
「はい」
「女の子は秘密が多い方が魅力的だと思いませんか？」

冗談めかしにリノは言う。つまり深く追求するなと言う事だ。

「はぁわかりました。これ以上は聞きません」

「ありがとうございます」

話を打ち切ってリルの方へ行くとスクロールを持ってまだ呆然としていた。

「ありゃリルちゃん？」

「どうしてお姉ちゃんはあたしにここまでしてくれるの？」

当然といえば当然な疑問だ。森でのお礼は既にネックレスで終わっているはずだ。

「ん～どうしてって聞かれても…」

特に理由は無かった。リノは自分のやりたいようにやってるだけだからだ。

「そうね、リルちゃんが回復魔法を使えたら村長さんの負担が少し減るから…かな？」

疑問系だったが実際村長ももう年だ。他の人が回復魔法を使えたら便利なのは確かだ。

「むー答えになってるような、なってないような」

だがリルは少し不満気だった。

「まぁまぁとりあえず使ってみて」
「…うん」
納得はしてない気もするが構わず進める。リルはスクロールを開いて中を読んだ。
数分後読み終わったリルの手元からスクロールが消えた。
「わ、消えちゃった」
「ん、それでもう使えるはずよ」
何か試しに使えないかと辺りを見渡す。
「よう」
そこへ傷だらけのハンスがやってきた。
「ハンスさんその傷どうしたんですか！」
「あぁ盗賊どもを掃除しててな」
姿を見ないと思ったら盗賊を倒しにいってたそうだ。
「これで明日にでも出発できるぞ」
ハンスはそれだけ言って去ろうした。
「あ、ハンスさん」
「ん？」
それをリノは呼び止めた。

「治療しますから来てください」
「おいおい大した傷じゃないから気にしなくていいぜ」
「あ、治療は私じゃなくリルちゃんがします」
「え？」

とハンスとリルが目を丸くした。

「ほらリルちゃん覚えた魔法を使ってみて」
「え？でも…」
「お、なんだ嬢ちゃん魔法使えるようになったのか？」
「えぇまだ試してはないですが」
「なんだ俺は実験台か」

がははとハンスは笑った。

「よっしゃ、協力しようじゃないか」
「ありがとうございます」

リルは怖々と傷の辺りへ手を翳(かざ)した回復魔法【ファーストエイド】を発動させた。
翳(かざ)した手が淡く光った。

「お、傷がなくなった」
「よし成功ね」

リルは手を離しホッとした。

「嬢ちゃんありがとよ」

ハンスはリルの頭をポンポンと叩いた。

礼を言って他の人たちの様子を見て来ると村長の元へ行った。

「これでリルちゃんも魔導師の仲間入りね」

返事の無いリルを見ると自分の手をじっとみていた。

「あたし魔法を使ったんだ…」

どうやら余韻に浸っているようだ。顔がにやけている。
その後もにやけてるリルを連れて他の商品も見せて貰い地図と布と綿、その他小物を数点買い露天を後にした。
露天を離れる前にランドに魔法石の話はしないようと釘をさしてきた。

09話：姉妹

～宿屋～

森へ行ってくるというリルと宿屋の前で別れリノはロイ夫妻の部屋を訪れた。

コンコン

「どうぞ」

「失礼します」

部屋へ入るとロイとマリナがいた。

「どうしたんだい？」

「はい、お2人に話がありまして」

真面目な顔で話し始めたリノにマリナとロイは居住まいを正した。

「改まってどうしたんだい」

「はい、色々考えたんですが…王都へ行こうと思います」

「理由を聞いても良いかい？」

「はい」

一呼吸おいて話を続けた。

「理由は王都に同じ世界の人がいるらしく会ってみたいんです」

「ほぉ、と言う事は同じマイスターなのかい？」

「いえ、マイスターはわたし以外は既に他界してます。マイスター以外の１０人その内の２人らしいです」

セフィロトに後から聞いた話をしていなかった事に気がついた。

「王都にいるという事しかわからないんですが気になる名前を聞きましたし」

「なるほどね」

ロイは納得したようだ。

「それにこの世界を見て来たいというのもあります」

知らない世界、だからこそ見て回りたい。

「リルにはもう言ったのかい？」

「まだです。先にお話しておこうと思いまして」

「伝えておこうかい？」

「いえ、自分で話します」

「そうかい、出発する日が決まったら教えなよ」

「もちろんです」

話を終えたリノは自室へ戻った。

〜自室〜

「さてっと」

買ってきたものを端へ置いた。

「えーと、この布と綿とあとこれもか」

そこから買ってきた布などを取り出しベッドに広げた。

「よしやりますか」

まずは布に補助魔法【強化】を掛けた。これで劣化をかなりの間防げるはずだ。

次にリノはスキル【人形制作】を発動した。するとベッドに広げた材料がたちまち人形になっていく。

3分もしないうちに材料だったものはなくなり黒いうさぎと白いうさぎの人形がベッドに乗っていた。

「うん、良い出来栄えね」

人形をインベントリへ入れ部屋を後にした。

～広場～

宿屋から出たリノは広場にランドとハンスの姿を見つけた。
「お2人でどうしたんですか？」
「ん？おぉあんたか」
リノに気がついたハンスが返した。
「今後の予定を詰めてたんだよ」
「盗賊もいなくなりましたのでそろそろ王都へ向けて出発しようかと思いまして」
「そうなんですか、ちょうど良かった」
「何がだ？」
そういったリノにハンスが聞き返した。
「えぇわたしも王都へ向かおうと思いまして良かったらご一緒できないかと思いまして」
「私は一向に構いませんが」
「そりゃ俺だってあんた程の回復魔法が使えるのが一緒ならこっちから頼みたいところだが良いのか？」
「はい」
「わかった、それじゃ出発は明日の予定だから準備しとけよ」
「了解です」
これで王都へ行く算段がついた。1人でも大丈夫だが道に迷いそうだ。
話を切り上げてリルがいるはずの森へ向かった。

～トレントの森～

「お、いたいた」

いつもの場所にリルの後姿が見えた。しかし誰かと話しているように見える。

「誰かいるのかな？」

とりあえずリルの元へ歩いていった。

「リルちゃん」

しかし反応がない。そして近くにシンがいた。

「リルちゃん？」

聞こえてなかったのかと思いもう一度呼びかけた。

「お姉ちゃん…」

今度は返事があった。だがリルの声は沈んでいた。

「どうしたのリルちゃん？」

「お姉ちゃん王都に行っちゃうの？」

「え？どうしてそれを…」
「やっぱり本当なんだ」
「うん、明日商団と一緒に行くことになってるの」
どうしてその事をリルが知っているのか答えはすぐにわかった。
「私が話しました」
リルに話したのはセフィロトだった。余計な事をとリノは思った。顔に出ていたのだろうかセフィロトは心の声に対して返事をしてきた。
「私が話したのは貴女がいつか王都へ行くという内容です。それを先程の貴女の発言が肯定しました」
「どうしてわたしが王都へ行くと思ったんですか」
「貴女は忘れていますが、最初にこの世界へ呼んだ時と現在の貴女と接した印象から推察しました」
「なるほどね。わたしそんなにわかりやすいのかしら」
自分にない記憶の話をされると反論し辛い。
「って、そんな事よりもリルちゃんと話さないと」
「私は邪魔になりそうですのでここでお別れです」
そうしてリルの方へ向いた。
「ごめんねわたしから話したかったんだけ、こんな形になっちゃって」
「お姉ちゃん…本当に行っちゃうの？」
「うん」

しっかりリルの目を見て頷いた。

「あのね、シンが言ってたんだけど王都にわたしと同じ世界から来てる人がまだ生きてるらしの」

「だからね、わたしはその人に会ってみたいのよ」

「…」

リルは答えない。そのままリノは話を続けた。

「それにね、このままこの世界で暮らすなら一度世界を回ってみようと思ったの」

ここまではロイ夫妻に話した内容だ。

「それにもしかしたらわたしの記憶についてわかるかもしれない」

「あ…」

記憶については正直望みは無いようなものだ。

「そうだね…お姉ちゃん記憶が無いんだよね」

ますます沈んでしまった。

リノはなんと声を掛けようかと考えていた。

「あたしね、お姉ちゃんが欲しかったの」

ポツリとリルは言った。

「それでね、お姉ちゃんが遊んでくれたのがすっごく嬉しかった」

「うん」
「お父さんを助けてって言った時も助けてくれた」
「うん」
「嫌な事を言った時も許してくれた」
「うん」
「魔法も教えてくれた」
「うん」
「だからね、お姉ちゃんがほんとにあたしのお姉ちゃんでいつまでも一緒にいられたらって思ったの」
「うん」

そこまでいってリルは顔を上げた。

「でも、お姉ちゃんもいろんな事をしたいよね。行きたい場所もあるよね」
「リルちゃん…」

リノはすぐに答える事が出来なかった。

「だからわがままは言わない。王都へ行くのも止めない。でも時々でいいから思い出して欲しいの」

リルは懸命に涙を堪えている。
そんなリルと同じ高さに顔を持っていき目を真っ直ぐ見た。

「リルちゃん勘違いしてるかも」
「え？」

何の事かわからずリルはキョトンとした。

「まずね、わたしは確かに王都へ行くけど二度と村に帰らないわけじゃないのよ」
「そうなの？」
疑問には答えず話を続けた。
「確かに一緒にはいられないけど、わたしをマリナさん、ロイさん、リルちゃんは家族に迎えてくれたよね」
「あ…」
「だからわたしとマリナさんとロイさんは両親にリルちゃんとは姉妹になったの」
「…」
「少なくともわたしはそう思ってるしマリナさんやロイさん、何よりリルちゃんもそう思ってくれてると思ってた」
少し意地悪な顔でリノは言った。
「もしかして違ったのかな？」
「そんな！そんな事ない！」
リルはリノへ向かって勢いよく言い放った。リノはしてやったりという表情になった。
「うんそうだね、だから離れていてもわたしとリルちゃんは姉妹なの。これは誰にも否定させない」
まるで世界へ宣言するように強く言い放った。
リルはとうとう涙を零した。
「それにわたしも妹が欲しかったのよ？」

「お姉ちゃん…嬉しい、すごく嬉しいのに涙が止まらない」
「うん、わたしも凄く嬉しいよ」

リルが泣き止むまで優しく抱きしめた。
しばらくしてリルが離れた。

「ん、もうだいじょうぶ」
「うん」

まだ目が赤かったがリルが言うように大丈夫だろう。

「あ、そうだリルちゃんにこれを渡そうと思ってたんだった」
「？」

そうしてリルはインベントリから作ってきた人形を取り出した。

「これどうぞ」
「わぁ可愛い」
「ネックレスの代わり。気に入ってもらえると良いんだけど」
「うん！ありがとう大事にするね！」

とても喜んでくれた。
その後、日が傾くまで2人で遊んだ。

「そろそろ帰ろっか」
「うん」

黒いうさぎはリノが白いうさぎはリルが持ち2人は空いた手を繋いで宿屋へ帰った。

～宿屋～

「ただいま～」
「おかえり」

マリナはリルが二匹のうさぎの人形を抱えてるのに気がついた。

「おや可愛いうさぎだねぇ」
「うん、お姉ちゃんのお手製なの」
「へぇ上手いもんじゃない」

マリナはうさぎの人形の緻密な作りに感心した。

「いえ、確かに裁縫は出来ますが今回は時間も無かったので別の手段を使いました」
「別の手段？」
「はい、まぁ魔法とは少し違いますが同じようなものです」
「そうなのかい」

マリナは関心があるようだ。

「あ、ちょっと待っててください」
「？」

リノは部屋へ戻って露天で買ってきた布を持ってきた。

「それをどうするんだい？」

「まぁ見ててください」

リノはテーブルに布を広げスキル【裁縫】を発動した。

瞬く間に布がエプロンに変わった。

「はい、マリナさん」

「は～こりゃたまげたね」

マリナは受け取ったエプロンをじっくり見ていた。

「うさぎの人形も同じですけど布そのものを魔法で強化してありますので耐久年数はかなりあるはずです」

「そうなのかい？これも大分痛んでるからそいつは助かるね」

マリナは早速着けているエプロンと交換し厨房へ向かった。

リノは盛大な夕食（そうべつかい）を終え部屋へ戻った。

～自室～

「さて、明日の準備でも…っても最初から揃ってるけどね」

やることが無くなったリノは窓の外を見た。

「まだ数日しか経ってないのにずっと住んでた気がする…」

コンコン　感慨に耽(ふけ)ってるとノックが聞こえた。

「どうぞ」

ドアが開いた先にはリルがいた。

「お姉ちゃん一緒に寝ても良い？」

「うん良いよ」

そうして2人は眠りに落ちるまで話続けた。

１０話：慌しい出発（前書き）

辺境の村＝トレントの村です。

１０話：慌しい出発

～自室～

ゆさゆさ

「お姉ちゃん起きて」
「んあ～もう少し…」

ゆさゆさゆさ

「ダメだって」
「うゅ」
「起きてってば！」
「ぐぇ」

あまりにも起きないのでとうとうリルがベッドにダイブした。

「お姉ちゃん！今日出発でしょ」
「うぅ…起きるわよ…」

リルがベッドから降りるともぞもぞと起きだした。

「おはようリルちゃん」
「おはようお姉ちゃん、ランドさん達は準備できてるみたいだよ」
「うぇホントに！？」
「うん、だから早く着替えて顔洗ってね」
「うん、わかった」

そしてリルは部屋から出て行った。これではどちらが姉かわからない。

「はぁ～出発の日なのにまったく締まらないわね」

急いで着替えをし今度は短剣ではなく弓を持つことにした。

～食堂～

「おはようございます！」

「おはよう、やっと起きたかい」

ドタドタと慌しく食堂へきたリノにマリナは呆れてた。

「まったく、これじゃどっちが姉なんだかね」

「うぅ面目ないです」

さっき自分でも思った事を改めて言われ凹むリノだった。

「さぁ早くこれ食べな」

「はい、いただきます！」

いつものパンとスープだった。

「ご馳走様でした！」
「はいよ」
「いってきます！」
「あ、これ持っていきな」
マリナは包みを投げ渡した。
「ありがと～」
「気をつけなよ」
「いってらっしゃい」
「はーい」
またもやドタドタ慌しく出て行った。

～村の入り口～

「お、ようやく来たな」
「遅くなりました！」
商団と護衛は既に準備を終えて村の入り口で談笑していた。
ちなみにロイの姿はない。
「遅くなってすみません」
「まだ少し早いから構わんさ」

「あれ？リルちゃんが急かすからてっきりもう時間なんだと」
「そそっかしいな嬢ちゃんは」
わははとハンスは笑った。
「まぁ昨日の宴会は盛り上がったしな」
「あ～確かに昨日は凄かったですね」
昨日はリノが王都へ行くと聞きつけた村長によって村人全員参加でリノの（序でに商団と護衛のギルドも）送別会が強行されたのだ。なので本日の見送りは無い。
「男衆は殆ど酔いつぶれてましたし」
「あぁさすがに俺達はあんまり飲まなかったけどな」
「でしたね」
リノが倉庫から引っ張り出して来た３０本近いワインが残らず飲まれたぐらいだ。
「それもリノさん」
「あ、呼び捨てで結構ですよ」
「ああ、俺も呼び捨てで構わないしもっと楽に話してくれ」
今更呼び方が変わった。
「んで、リノが出して来た干し肉もかなり好評だったしな」
「あ～たまたま手に入れたものだったんだけどね。マリナさんや他の奥さん達の腕が良かったのよ」
同じく倉庫に眠っていた干し肉を提供したのだ。どうやら倉庫やイ

ンベントリに入れたアイテムは劣化をしないようだ。

「そろそろ出発しましょうか」

「わかった」

「了解です」

そうして銘々馬へ乗った。リノは馬がいないのでランドの馬車の御者台に乗せてもらった。

それを確認したハンスの掛け声で出発した。

〜街道〜

「今更だけど今後の予定を聞いてなかったわ」

一緒に王都へ行くとだけ行って予定をまったく聞いていなかった。

「おう、とりあえずこの村から2日程の場所にあるケントって村で食料を調達だな」

「ふむふむ」

「そこから山越えになる」

「山越か…」

地図でみると確かに王都へは山越えが最短ルートだ。

「あぁ最初は各町へ寄ってたから山を迂回するルートだったが後は王都へ直行だからこの方が早い」

迂回ルート上には町や村が3つ程あった。

「最短だと掛かる日数はどのくらいかかるの？」

「だいたい一週間ってとこだな。迂回ルートは素通りしても3週間は掛かるからな」

「なるほど」

ゴトゴトと時たま獣が出たが比較的のんびりと2日の道のりを進んでいった。

～ケントの村前～

「おーし、もうすぐ到着だ」

日も傾いた頃に村が見えてきた。規模としては辺境の村よりやや大きいといったところで特産はぶどう酒との事だ。

「今日のところはそのまま宿屋へ直行するぞ」

「はーい」

そうして村へ入った。

～宿屋～

馬と馬車を所定の場所へ置いていき宿屋へ入った。

「ようハンス遅かったな」

そう声を掛けてきたのは宿屋のカウンターにいた中年の男性だった。

「あぁトレントの村へ行く途中に盗賊に襲われてな。その掃除に時間が掛かったんだ」

「あの連中か、でもハンス達が苦戦する程の規模じゃなかったと思うんだが？」

「それがな聞いてたよりも人数が増えててな」

「そうだったのか」

「まぁ掃除は済ませたからもう大丈夫だと思う」

「そうかご苦労だったな」

という会話終えたら宿帳への記帳も終わっていた。さすが手馴れている。

「それと親父まだ部屋は空いてたよな？」

「ん？あぁもう一つ空いてるが」

「だそうだ」

ハンスはリノにそう伝えた。

「ありがとう、それじゃわたしもお願いします」

続いてリノも代金を払い記帳した。

「これでよしっと、それじゃ先に休ませてもらうわね」

主人に部屋の鍵を受け取り部屋へ向かった。

「ハンスよ、あの別嬪さんは誰なんだ？」

「あぁあいつは…」

「ハンスさん！」

突然会話に若い男性が入ってきた。

「お、ルイじゃねえかもう大丈夫なのか」

「はい、お陰さまで！」

「って、顔がまだ赤いぞ」

ルイと呼ばれた男性はシースパローのメンバーで魔導師だ。

だがこの村に着いてそうそうに高熱で寝込んでしまったのだ。

「ってそんな事より今すっごい可愛い子がいたんですよ！」

ルイは興奮で顔が赤くなってだけだった。

「そいつは良かったな」

ハンスは相手をするのが面倒になった。前にいる宿屋の主人も呆れている。

「あ、なんですかその反応。ほんと可愛かったんですってば！」

「あーはいはい。俺は疲れたから部屋で休むことにするよ」

そう言いハンスはルイを置いて部屋へ向かった。

～リノの部屋～

「ふぅ～案外疲れるわね」

ゲームとしての旅には慣れているが実際に旅するのは初めてだった。肉体的にはともかく精神的には結構疲れていた。

「えーと、確か明日を食料調達と積込みで使って明後日出発だったわね」

基本的に必要なものはインベントリに入ってるリノは明日はフリーという事になる。

「ん～準備を手伝っても良いけど…」

下手に手伝うより慣れてる人間だけの方が捗(はかど)る時もある。

「一応ランドさんの会ったら聞いてみよ」
「後はわたしも食料を調達しなきゃ」
そう思ってリノは必要なものをリストアップした。
書き出し終えるとリノはベッドへもぐった。

１１話：突然の告白（前書き）

読み始める前に活動報告の「東風のリヴィエラについて」をご一読ください。

11話：突然の告白

～リノの部屋～

「うー眩しい」

窓の隙間から朝日が差し込みリノの顔を照らす。

「あーうー」

変な声を出しながら起きだした。

「ん…そっかケントの村にいるんだっけ」

辺りを見渡し寝惚けた頭でそこまで思い出した。

「とりあえず起きよっと」

着替えて顔を洗い残っていたパンを食べた。

「さて、とりあえず村を見て回ろうかな」

その際カウンターにいた宿屋の主人に挨拶をして外へ出た。

「お、ハンスじゃない」

外へ出てみるとハンスが剣を持ってどこかへ歩いて行く姿が見えた。

「どこ行くんだろ？」
なんとなく後を追いかけてみる事にした。

～村外れ～

「セイ！」

気合の入った声が聞こえてきた。

「お、もしかして修練でもしてるのかしら」

リノは邪魔にならない様にゆっくり近づいていく。

「誰かいるのか？」
「ありゃ気づかれちゃったか」

しかし気づかれてしまった。

「リノか、何か用か？」
「ん～ハンスがこっちに行くのが見えたから来てみただけ」
「なんじゃそりゃ」
「ね、見ててもいい？」
「そりゃ構わんが見ててても楽しいもんじゃないぞ」

「まぁまぁ良いじゃないの」

そう言うとハンスは素振りに戻り、リノはその姿を眺めながらスキル【調理】でドリンクを作っていた。

「ふぅ」

「お疲れ様」

その後１０分程素振りを続けてハンスは一息ついた

「はい、どうぞ」

「お、サンキュ」

先程作ったドリンクを渡した。

喉が渇いていたのだろ一気に飲み干した。

「体力回復効果があるから疲れも取れるわよ」

「おぉ美味い上に気が利くね」

「惚れないでね？」

「惚れねぇよ」

冗談だと分かってるから2人して笑った。

「それじゃ休憩入れようと思ってたけどそのまま続けるか」

そういってハンスは剣を持って構えた。

「良かった相手になろうか？」

「え？お前が？」

「うん」

目を丸くするハンスに頷く。
「でもお前って弓じゃなかったか？」
「えぇそうよ。でも伊達に一人旅なんかしてないわよ」
「うーん、でもなぁ自分で言うのも何だが結構ハードだぞ？」
「大丈夫。ま、やってみましょ」

リノは自前の剣を取り出し構えた。
ハンスも半信半疑だったが同じように剣を構えた。

「いつでも良いわよ」
「そりゃ俺の台詞だよ」

そうしてハンスはリノに向かった。

「セイ！」

ハンスの右手に持った剣が疾った。リノはそれを軽く捌いた…つもりだった。
ガキン！と剣が交差した瞬間ハンスの剣が根元から折れてしまったのだ。

「んな！？」
「ありゃ」

ハンスは折れた剣を見て絶句した。
リノもリノで驚いていた。

「なんじゃこりゃー！！！」

我に返ったハンスは絶叫した。

「うーん、まさか折れるとは思ってなかったわ」

「俺だって思ってないわ！」

興奮が収まらない収まる分けもないハンスだった。

「ごめんね、まさか折れるとは思わなかったから」

「い、いや俺もまさか折れるとか思わなかった」

少し落ち着いたハンスにリノは詫び入れた。

「ちょっと見せてくれる？」

「あぁ」

受け取った剣の柄をスキル【解析（アナライズ）】を発動してみた。

「ありゃこれ手入れしてるの？大分草臥（くたび）れてたみたいよ」

「あーそりゃ盗賊相手にしたせいだな」

どうやら盗賊の相手でかなり消耗していたようだ。

かなり使い込んでたようでＭＡＸ耐久値がかなり低くなっている。

「まぁそろそろ新調しようと思ってたとこだし丁度いいだろ。だから気にすんな」

ハンスはそう言うが少し罪悪感がある。

「良かったらその剣借りても良い？」

「そりゃ構わねぇがどうするんだ？」
「内緒」
「なんじゃそりゃ」
ハンスは納得はしてない様だったがそれ以上は聞かなかった。
「まぁいいや、俺はランド探さなねぇと」
「そう、じゃわたしは行くね」
「あぁ」
ハンスと別れ来た道を戻って行った。

～道具屋前～

「ありがとうございました～」
雑貨兼食料品店（以後は道具屋）からルイは外へ出た。
「えーと、後はなんだっけ」
購入メモを見ながら次に向かう場所を決めていた。
「後はランドさんの仕事か」

と、考えていたら躓(つまず)いてしまった。

「おわ！」

何とか荷物がばら撒かれるのは阻止した様だがその分盛大にコケてしまった。

「痛つつ」

「あの大丈夫ですか？」

頭上から声を掛けられた。

「あ、はいこのくらい大丈…ぶ…」

「？」

顔を上げ声の人物が昨日の可愛い人だという事に気がついた。

「あの…？」

顔を上げた途端に動きを止めたルイに声の人物はどうしたのかという視線を投げていた。

「あ、何でもありません！このくらい大丈夫です！」

「え…あ、そうですか」

「はい！お手数掛けました！」

「いえいえ、ではわたしはこれで」

そう言って声の人物は店へ入っていった。

「あぁ…声も可愛い…」

ルイは声の主が入った店をしばらく見続けた。

～道具屋～

「いらっしゃい、何をお求めで？」

店番の男性が声を掛けてきた。

「えーと、食料をいくつかと…」

店の商品を見ながら指定していく。

「調味料はありますか？」

「はい、こちらになりますね」

「じゃあ後はこれとそれをください」

「毎度」

そうして買い物を終え道具屋を後にした。

～道具屋前～

道具屋を出ると先程の男性がこちらを見ていた。

「あら？どうかしましたか？」

「はい、お話があって待っていました」

さっき会ったばかりなのに話とはなんだろうか。

「何でしょうか？」

「はい…」

それっきり黙りこんでしまった。心なしか肩は震えてるようにみえる。

「あの…」

声を掛けたら顔を上げた。

「僕と付き合ってください！」

と言ってきた。

「……は？」

リノはポカンとした。

会ったばかりの人間に交際を申し込まれたのは初めてだから仕方がない。

「…」

告白した本人は頭を下げたまま動かない。

「えっと…ごめんなさい」

当たり前だがリノは断った。

「何故ですか！」

「いや、何故って言われても…」

「ちくしょー！！」

男性は突然叫びながら走り去っていった。

「なんだったのかしら」

リノは立ちすくした。

「リノさんどうかしたんですか」

「あ、ランドさん」

横からランドが声を掛けてきた。

「いや、さっき突然交際を申し込まれたんですよ」

「おや、モテますね」

「冗談はやめて下さいよ。初対面の人間に告白されても気持ち悪いだけです」

「ははは」

2人して苦笑いになった。

「ランドさんは出発の準備ですか？」
「えぇそんなところです。リノさんもですか？」
「わたしもそんなところです」

と手に持った食料を見せた。

「なるほど、それじゃ私も手早く準備をしましょうか」
「手伝える事があったら手伝いますので」
「はい、その時はお願いします」

大して手伝えない気もするがそう言っておく。

「では私はこれで」
「はい」

そうしてそれぞれの方向へ別れた。

１１話：突然の告白（後書き）

一目惚れってやつですかね。次話以降もう少し長く書いて投稿しようかと思ってます。

12話：アイテムクリエイト

～リノの部屋～

「よーし、それじゃ拠点（ホーム）へ行ってみましょうか」

鍵をかけインベントリから指輪を取り出した指に嵌めた。

「んーデザインはかなりシンプルなのよね」

「転移、『玉兎の箱庭』」

一瞬で視界がブラックアウトし次に見えた光景はリノの拠点（ホーム）である玉兎の箱庭の中だった。

玉兎の箱庭というのはリノの拠点（ホーム）の名前だ。

「おーなんだか久しぶり」

「まだそんなに経ってない筈なのに何だか懐かしい…」

リノは何かを振り払うように頭を振り出した。

「よっし、気を取り直してっとログの確認でもしましょうか」

リノは箱庭のログを確認する為にウインドウを開いた。

「ん～やっぱどこにも繋がってないからログがないわね」

「あらセフィロト？ここにあるって事は箱庭の使い方でも書いてあるのかしら」

リノの予測は当たっていた。内容は施設利用についてだった。

「ふーん、セフィロトも万能じゃないって事ね」

「ま、いいや後は使ってみればわかるでしょ」

箱庭の中の鍛冶場へ向かった。

「うーん、ブロードソードかぁ」

ハンスの剣はブロードソードに分類され柄も含めた全長が９０ｃｍ程の剣だ。

「材質は鉄…みたいね」

鍛冶メニューを開くと鋳造と鍛造の項目があった。

「えと鋳造でいいかな」

鋳造に使う素材リストをスクロールして確認する。

「ありゃこの間補給した筈なのに鉄鉱石切らしてるじゃないの」

「ん～まぁ無い物は仕方ないか」

リノはスキル【分解】《リサイクル》を発動させた。

するとハンスの剣は剣身部分が鉄塊になり柄部分が消滅した。

「ん～少し足らないか」

分解（リサイクル）すると元のアイテムより質量が減ってしまう時がある。

「じゃこれを混ぜよっと」

リノは箱庭の倉庫から別の素材を用意した。

「よしこれで準備は完了っと」

「確かセフィロトは施設を使うスキルは実際にわたしが動く必要があるとか書いてあったわね」

材料を持ち作成する武具を選択。

後は所定の位置に着いたら自動で開始されるはず。

「おぉ凄い手順がどんどん浮かんでくる」

「なるほどこの通りにすればいいのね」

そのまま黙々と作業を続けた。

〜ケントの村〜

リノと別れランドを探して歩くハンス。

「ハンスさぁ〜ん」

「ん？」

ハンスは情けない声でを呼ばれた気がするので振り返ってみるとル

イがこちらへ来ているのが見えた。
「うわ、また面倒そうな感じだな」
一瞬苦い顔をしたがハンスだがルイが来るのを待った。
「なんだ、そんな情けない声を出して」
「聞いてくださいよ、道具屋の前で昨日の可愛い子と会ったんですよ」
「ほぉそいつは良かったじゃねぇか」
「そうなんですよ」
なら何故そんなに情けない声を出すのかハンスは疑問に思った。
「それでどうしたんだ？」
「道具屋の前で転んだ僕を気にかけてくれたんですよ」
「ま、そりゃ目の前で転ばれたら気にするだろうよ」
「その後道具屋へ入ったんですが、これは運命だと思ったんです！」
「だから、道具屋から出てきたところで告白しました！」
「…は？」
ハンスは呆気に取られた。
「でも断られました…」
「当たり前だ」
「一体何が悪かったのか…」
「バカだこいつ…」
ルイは失敗した原因を理解（わか）っていなかった。

「だから何度も言ってるが初対面の人間に告白されたら気持ち悪いだけだ」
「えー僕は嬉しいですよ」
「はぁもういいや…」
ハンスはルイを諭したがいつもの遣り取りになってきたので話を切り上げた。
「こいつに目をつけられるなんて不幸なやつだ」
既に話を聞いていないルイを放ってランドを探しに馬車小屋へ行った。

〜鍛冶場〜

「よっし完成〜と」
思い浮かぶ手順どおり作業を終え一振りの剣が完成した。
「あれ？」
出来た剣を手にとって見たら若干元の剣より大きくなっていた。
「合金にしたせいかな？」

リノは首を傾げた。

「まぁ考えても仕方がないわね」

リノは完成した剣を鞘に納めてインベントリへ格納する。

「後は何しようかな～」

思案しながら鍛冶場を後にした。

～道具屋～

「いらっしゃい」

「どうも」

「あ、旦那久しぶりです」

食料などはいつもここで手配をしている。

「用意してありますよ」

「いつも助かります」

「なんのこっちも旦那のお陰で助かってますからね」

田舎では基本的に自給自足であまり道具屋で食料を買う人がいない。
その点ランド達は定期的に買い込んでくれるからお得意様になっている。

「それじゃこれ代金です」
「毎度あり、そういえばさっき外で付き合ってくれとか何とか聞こえましたが？」
「あぁハンスのとこのルイが告白したみたいですよ」
「ルイ…ってあの新人の？」
「えぇ、まぁ病気みたいなものですから気にしないでやって下さい」
「はぁランドさんがそう言うなら…」

店員は気にしない事にしたようだ。

「それじゃ私はこれで失礼します」
「ありがとうございました～」

ランドは道具屋を出て積込みに馬車へ向かった。

～厨房～

「ん～改めて見るとわたしが覚えてるのと違うような気がする…」
鉄鉱石の残数を始めアイテムが増減してたり施設が増えてたりして

いる。

「いつの間にか厨房があるし…ここって確か書斎だったよね？」

自問したが答えは返ってくる筈もなかった。

「ありゃもうこんな時間経ってたの」

備え付けの時計を見たら入ったときの時刻から結構過ぎていた。

時間にすると午後3時といったところだ。

「うーん、厨房もあるし料理でもしてみましょうかね」

リノは早速厨房へ移動した。

「ふむ、一通りは揃ってるのね」

置いてある器具を確認すると基本的な調理器具は置いてあった。

「さっき買った材料でパウンドケーキでも焼きますか」

インベントリから道具屋で買った小麦粉、砂糖、卵にバターを取り出した。

「それじゃ始めますか」

馴れた手つきで準備をしていく。

「ほいほいっと」

ボールにバターと砂糖を加え泡だて器で混ぜていき全体がクリーム色になってきたところで溶き卵をゆっくり混ぜる。
混ざったところで小麦粉を加えてまた混ぜる。

「これじゃ味がイマイチか…良し！これ入れよ」

取り出したのは干しブドウだった。それを加え更に混ぜる。

「そろそろいっかな」

リノはバターを薄く塗った型に混ぜ合わせた生地を流し込んだ。

「とんとんっと」

型を少し上げて台に落とし空気を軽く抜く。

「後はかまどに…ってかまど！？」
「うーん、これってどう使うのかしら？」

かまどで作るのは初めてらしくリノは困惑していた。

「セフィロトの説明に何か書いてないかしら」

リノはログウインドウを開き確認した。

「へー入れるだけでいいんだ。こりゃ便利ね」

早速かまどに型を入れた。リノはかまどに入れて待つ間に片づけをしておく。
そして２０分程経過しかまど開いた。

「お、良い感じに焼けたわね」

かまどから型を取り出したらキレイに焼けていた。

出来立てなので熱かったがリノは素早く型から外し切り分けた。

「よしよし、早速食べてみよ」

端の部分を手に取りパクッと食べた。

「おぉ、結構美味しくできたわね」

半分ほど黙々と食べた。

「ちょっと張り切り過ぎたわね」

リノの目の前にはまだ２５ｃｍサイズのパウンドケーキが３つ程残っている。

「ま、インベントリ入れておけば問題ないか」

残りをインベントリへ収納し少しアイテム整理をして箱庭を後にした。

～馬車小屋～

「ふぅ、これで全部ですね」

必要な物資を馬車まで運び終えランドは運んでくれたギルド員に礼を言いチェックを始めた。
しばらくチェックを続けると日が昇りきってしまった。

「もうこんな時間ですか、そろそろお昼にしましょうかね」

積み込みをしていたギルド員に声をかけ各々昼食を取る事にした。
ランドも昼食を食べるため馬車小屋を後にした。

「ランドいるか？」

ランドが去った少し後にハンスがやってきた。

「ありゃ誰もいねぇじゃねぇか」
「あ、団長ランドさんなら昼食に行きましたよ」
「何？もうそんな時間なのか？わかった教えてくれてサンキュ」

教えてくれたギルド員に礼を言い馬車小屋を後にした。
その後も同じ村にいるのに何故かすれ違いが続き日が傾いてきた。

～宿屋～

「おぉこの指輪凄いわね」

箱庭から戻ってきたリノは指輪の効果に改めて驚いた。

「これで戻る場所が自由に指定できたら最高なんだけどね」

実際に試してみたが全て不発に終わった。

「まぁいいやハンス探そっと」

リノは部屋から出てカウンターにいた主人にハンスの居場所を聞いてみた。

主人の話ではハンスは先程ランドのいる馬車小屋へ行ったそうだ。

「馬車のとこか、積み込みはもう終わったのかな？」

早速リノは馬車小屋へ向かった。

～馬車小屋～

積み込みが終わったタイミングでハンスは用件を切り出した。

「でよ、ランド」
「はい、剣ですよね」
ランドは予想していた様で馬車の荷台から剣を何本か持ってきた。
「今あるのはこれだけですね」
「う～ん」
「やはりあの剣程のものは無いですね」
「だよなぁ」
どうやらハンスの剣は結構な業物だったらしい。
「とりあえず王都に着くまではこれで代用するしかないか」
「ですね」
ハンスは一番手に馴染む剣を取った。
「代金は王都へ着いてからで良いか？」
「えぇ構いませんよ」
2人がそんな会話をしているとリノが現れた。
「あ、いたいたハンス」
「ん？リノかどうかしたか？」
そう言えばリノとは朝以会って無いなとハンスは思った。
「えぇ朝借りた剣を返しにきたの」
「そうか」

リノは剣を取り出しハンスに差し出した。しかしハンスは受け取らずリノに話しかけた。

「おい、リノ」
「なぁに？」
「なんで剣が折れてないんだよ」
「ん～鍛えなおしたから？」

何故か疑問系でさらっと言うリノにハンスは開いた口が塞がらなかった。

「鍛えなおしたって…」
「ん～ただねぇ元の剣よりちょっと大きくなっちゃたのよ」
「いや、そういう問題じゃねぇよ」
「まぁまぁ折角なんですから見せて頂きますね」
「…そうだな」

ランドが横から割り込み話題を強引に変えた。

「おぉ」
「どうですか？」

剣を手に取ったハンスは声を出して震えた。
そんなハンスを見てランドは声を掛けたが聞こえてないようだ。
そのまま広い場所へ移動して何度か素振りをしていた。

「なんだよコレ、前の剣より良いじゃねぇか」
「ちょっと材料足らなかったから合金になっちゃってどうかと思ってたけどそれなら良かった」

「合金って…何混ぜたんだ？」
「銀鉱石」
そんな遣り取りを見ていたランド銀鉱石と聞き驚いていた。
銀鉱石は飛びぬけて高価なものではないがそこそこ高価な素材だ。
「リノさんあなた本当に何者ですか…」
という呟きは2人に聞こえてなかったようだ。
「ランド、見てみな」
「はい」
受け取ったランドはルーペを取り出し剣身から柄頭までじっくり眺めた。
「この剣、確かに前の物より良い物になってますね」
「だろ？」
あーだこーだと剣の議論を続けるハンスとランド、リノは蚊帳の外へ出されてしまった。
「もう、2人してわたしを除け者にするのね」
リノが傍らで拗ねているのに気づかない男2人だった。
そのまましばらく議論を続ける2人に対して拗ねるのも飽きたのかリノは残ったパウンドケーキを取り出した。
パウンドケーキは収納する直前の温度で保たれていたので温かかった。

「ん～これは便利ね」

そう思いながらもしゃもしゃ食べてると匂いに誘われたのか2人のどちらかのお腹が鳴った。

「うお、すまねぇ」

「何だか良い匂いですね」

「議論は終わった？」

「おぉ更にすまねぇな」

「はい、ハンスのお腹の音で終わりになりました」

ランドがそう言いリノとランドは笑ったがハンスはばつの悪い顔をした。

「あはは、2人とも良かったら食べる？」

「すまねぇな」

「ありがとうございます」

折角なので3人で食べた。

「美味いな」

「えぇこれで商売できそうですね」

「ふふ、ありがとう」

彼らにそう言われリノは若干照れていた。

「コホン、それでどう使えそう？」

「あぁ良い剣だよ」

ハンスはそう言って剣をリノへ差し出した。しかしリノは首を横の

振った。

「それはハンスに返すわ」
「そういう訳にはいかんだろうが」
「えーだって元はハンスの剣だし」
「いやいや」

ハンスとリノが遣り合ってるのをみてランドはまたかと思っていた。
まぁ今回はリルではないので言い合いが続いてる。

「よーし、じゃあそれでいいぞ」
「うっし交渉成立ね」

やっと終わったようだ。

「リノさんは相変わらずですね」
「そうかしら？わたしはわたしの好きな様にしてるだけよ？」
「なんじゃそりゃ」

ハンスは呆れてたがリノは割と本気だという事ランドはリルとの遣り取りで知っていた。

「そろそろ戻りましょうか」
「そう（ね）だな」

そして3人は宿屋へ向かった。
その後姿を見つめる影には気づかぬまま…

１２話：アイテムクリエイト（後書き）

最近妙に忙しくてさっぱり続けられません。この話は修正前ですが掲載しておきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7938r/

東風のリヴィエラ

2011年4月27日23時08分発行